FLASH BACK

犬助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＬＡＳＨ　ＢＡＣＫ

【Ｎコード】
Ｎ３９７６Ｌ

【作者名】
犬助

【あらすじ】
孤独を生きた少年と永遠を生きた少女が出会い、遠い未来を目指すお話。
歪な命同士が寄り添って生きていく、恋の物語。

プロローグ【起点、かつての想い】（前書き）

二次創作以外で初の投稿になります。拙作ですが、お暇な方は時間を潰すのにでもどうぞ。
某社の新人賞に投稿した作品なのですが、余裕の一次落ちでした（笑）
やはり第一線で頑張っている作家さんはスゴイんだなあと思います。

プロローグ【起点、かつての想い】

プロローグ　【起点、かつての想い】

子供の頃、よくテレビで特撮ヒーローを見ていた。異形の怪人、派手な色をした正義の味方、一撃必殺の決め技。

明確に分けられた正義と悪。幼い僕達は、悪が滅ぼされる姿を痛快に思い、正義の味方が振るう拳に憧れた。同じ思いを共有する幼い仲間達はヒーローを真似て走り回る。男の子にはありがちな、誰もが体験するか……見た事のある風景じゃないだろうか。

尤も……それはいつしか「幼稚」とされ、年齢を重ねるごとに遠くなっていく。それは僕もまた例外ではなかった。

大人に近付くにつれ知っていく現実。

この世界の罪と悪に、飛び蹴り一つで解決出来るヒーローが介在する余地は無い。

人外の怪人の方が、余程シンプルで可愛く思える陰湿な悪が世に蔓延っている。

人間の世界は入り組んだ事情に縛られ、罪と悪を裁くにも自由は無い。今日も今日とて、何処かで罪が生まれて誰かが泣く。裁かれるべきは明確なのに、思想と人権は咎人すらも守ろうとするのだ。

多くの人々はそれを諦める。世の中がそういう物だと。

多くの人々はそれに憤る。どうしてもっとシンプルに善悪を問えないのかと。

……僕は、その前者だ。だって仕方が無いじゃないか。何を望んでも仮面のヒーローにはなれない。普通に生きていれば、自分の性能なんて否応無く解る。大きくなるにつれてテレビの中のヒーロー

を幼稚だと思えるのは、そうやって自分を物差しに現実を理解するからだ。

不幸自慢なんかしたくもないが、どうにも僕の人生は世間一般に幸せとは思われにくい物だった。そんな事は気の持ちようで、幸せと思えばどんな境遇でも幸せと言えるかもしれないが……気の持ちよう云々を語られるならば、僕は幸せとは思えなかった。

「ヒーローは必要だと思いますか？」

もしそう問われるならば。

僕は、どう答えるだろう？

第一章【回想、絶望に至る起点】

第一章　【回想、絶望に至る起点】

夜泣きする赤子にイラついて虐待死。
都内公園に男性の変死体発見。
未成年男子複数の暴力による壮年男性死亡。
「……ビックリするくらい腐ってる」
ネットのニュースサイトを見て溜息が漏れた。最近……と言っても数年は経つが、世の陰惨な事件は枚挙に暇が無い。平和な日本なんて言っても死はあまりにも身近。事故死や病死では無く、確固たる殺意によってもたらされる死がこんなにも多い。
「平和だから……だろうけどな」
正直、僕はそう思っている。五十数年前から日本はもう戦争をする事は無く、戦争に加担する事も無く、平和を謳う国になった。日本人は持ち前の器用さで文明を大きく発達させ、世界との流通はこの国を潤した。第二次世界大戦直後、団塊世代と呼ばれる者たちの手によってこの国は経済大国へと生まれ変わったのだ。
だがどうだろう、先人によって雛形が固められたこの国の進化は腐敗の一途を辿った。加害者に甘い刑法、法に守られた未成年。「むしゃくしゃしたので誰でもいいから殺したかった」なんて犯罪が横行する国に成り下がった。
（与えられたが故の腐敗、か）
今のこの国を作り上げたのは、戦争を越えた大人たち。彼らが作り上げた世界を受け取っただけに過ぎないこの国の若者は……僕たちは、自分たちの世界が腐っていくこと憂う事が出来ないのかもしれない。
この国を作り上げたという誇りが持てない僕たちは、これが当然

だと受け入れて。与えられた世界を、勝手気ままに壊すだけで。モニターから目を逸らすと、時計が目に入る。どうやら思ったよりニュースに見入っていたらしい。……もうバイトの時間だ。

「さて……行くか」

財布と携帯だけをポケットに押し込んで僕は部屋を出た。「行ってきます」と言う必要も無ければ振り返る必要も無い。後ろ手に閉じたドアの先には誰もいない。

僕は、一人で暮らしているからだ。

僕には親がいない。有り体に言えば捨て子というやつだ。生みの親に捨てられたという事実は不幸なのだろうが、幸いにも暖かい春の路地裏に置き去りにされた僕は一命を取り留めた。凍えるような冬であれば死んでいただろうし、野犬の類が徘徊していなかったのも幸運だったと言える。まさに不幸中の幸いといったところか。

『あなたの家族は私たちよ』

そう言って微笑んでいた老女……僕が引き取られた孤児院の院長先生の笑顔が、僕の覚えている最初の記憶である。

「……おはようございます」

「はよーッス」

バイト先で同僚に挨拶すると、気の無い返事が返ってきた。特に友好の念も無ければ嫌悪の念も無い。まさに仕事の上でしか付き合いの無い乾燥した間柄だったが、それでいい。それが僕の望みだからだ。

自分の周囲に人を置かない。いつからか僕はそれを好むようになった。理由は……結構鮮明に覚えている。

本当に幼い頃。僕はまだ四つか五つの子供だった。その頃は同じ孤児の仲間同士でよく遊んでいたし、子供向けの特撮番組の真似事をして飛び回っていた事も良く覚えている。あの時も、僕は友人達

とそうやって遊んでいたのだ。
《ギキキキィィーーーー！》
今も、その甲高いブレーキ音が耳に張り付いている。院長の言いつけを破り、孤児院の敷地外で遊んでいた僕は交通事故に会った。道路へ飛び出した僕に白い乗用車が突っ込んでくる。それはどれほどのショックだったのか、僕は衝突の痛みも感じないままに気を失った。
『お外に出ちゃダメだって言ったでしょう！』
病院で目を覚ましたとき、院長先生にこっぴどく怒られた事を覚えている。いや、心配して泣きながら病室に飛び込んで来てくれたのだけど、子供なんて怒られた事の方が記憶に残る物で。
でも、それよりも僕の心に強く残ったのは……友人達が誰一人見舞いに来てくれなかった事だった。
「ねえ、どうして誰も来てくれないの？」
「どうしてかしらねぇ……皆にもお見舞いに来てあげてって言ってるんだけど……」
僕は幼いながらに皆の情の薄さを恨んだものである。それでも、孤児院が世界の全てだった僕に皆を嫌う事は出来るはずもない。
僕が事故にあったせいで、怖い思いをさせてしまったんだ。
きっと、僕が事故にあったから皆は院長先生にすごく怒られたんだ。
帰ったら謝ろう。ちゃんと謝ったら、またいつも通りの日々が返ってくる。
そう信じて暗い感情を無理矢理捻じ伏せ、病院での日々を過ごした。でも、やっと退院して帰った孤児院では……誰一人僕の無事を喜ぶ者はいなかった。
「ど……どうしたの？」
「……」
僕が話しかけても、誰一人答えてはくれなかった。毛虫か何かを見たときのように、ギャーギャー騒いでくれたほうが多分マシだっ

たろう。子供心にそれは酷く傷付くだろうが、自分が相手にされている実感はあったはずだ。
でも、そうじゃない。かつての友人たちは、僕を知らない人間を見るような目で見ていた。先生たちの背に隠れたまま、黙りこくって。
「ね、ねえ！」
堪らず僕は当時の親友に駆け寄った。彼なら何か答えてくれる。ヒーローごっこだって、他の遊びだって、その子とは何をしても楽しかったし息がピッタリだった。
親友の手を握り締める。
「……っ！」
「……え？」
でも、その手は無言で振り払われた。「触るな」と、拒絶する言葉も無しにただ振り払われる。たとえ拒絶の言葉でさえ僕には掛けたくないとばかりに乱暴な手つきで。
僕は、そこで絶望した。
きっと僕のせいで何か嫌な思いをさせたのだろう。
でも、僕だって被害者で怖い思いをしたのに。
不思議とそこで泣き出すことも出来ず、僕は友人という存在を諦めた。幼く単純な思考は、自分を拒絶する者をあっさり敵として認識したのだ。そしてこの時から、僕には他人へのどうしようもない不信が根付いたのだと思う。
そこから年月も経ち、行動範囲が孤児院から学校というフィールドに移っても僕は独りだった。尤も、それに関しては作為的なものだったけれど。
極力目立たず人と接触しない。かといって大人しくしすぎてイジメの標的にもされないように適度に動く。遊びに誘われれば居もしない友人を盾に辞退し、断り切れない時は場を不快にさせない程度に遊ぶ。
「おまえってホント面白味ねーな」

「そ、そうかなぁ……」
かつて級友にそう言われた時、僕は困った顔をしつつも内心では満足げにほくそ笑んでいた。そうだ、これでいいと。
誰にも好かれず、誰にも嫌われず。
誰も恨まず、誰も羨まず。
決して大きく感情が動かないようにと。
例え疎まれているのだとしても、面と向かって言われないならどうでもいい。
正直な話、それが裏切りを恐れる僕の臆病さだと解っていた。心の奥底では、幼い日のように親友と笑いあう日々を望んでいた。それでも僕の心に張り付いた幼い日の傷跡は……どうしようも無いくらいに僕から勇気を奪っていた。
人間関係に苦痛を感じていた僕は高校にも居辛くなり、学校を中退して働きに出る事になった。院長先生に後見人になってもらい、今はコンビニのアルバイトで生計を立てている。

キシ、と軽い音がした。それが自分の歯軋りの音だと気付く。まるで叩き付けるように甦った負の記憶に、知らず歯を噛み締めていたらしい。
「どったの？　ボーっとして」
「あ……いや、何でも無いです」
「ああ、そう」
僕の簡潔な返答に、同僚はそれきり興味を失ったようだ。仕事に入ったばかりの頃は頻繁に話しかけられたものだが、今では仕事に必要な会話以外は交わさなくなった。
仕事に戻った同僚から店内に目を向ける。ダメだな、どうにも昔の思い出に耽ってしまっていたらしい。朝方にはサラリーマンやＯＬ、工事現場の作業人が一気に押し寄せてくるのであまり気を抜いていられない。
「混む前に袋補充しとこうぜ」

そういって同僚はコンビニ袋の補充を始めた。朝のラッシュ中にコンビニ袋が切れたらそれだけで結構なタイムロスになる。僕は同僚に倣って袋の補充を開始した。

夕方、コンビニのバイトを終えて僕は家路につく。

「……もうちょっとシフト増えないかなあ」

特に専門学校に通うわけでもなく、家に居る時間以外はバイトをしている僕にとって仕事量が増える事は問題じゃない。

むしろ趣味らしい趣味の無い僕からすれば、暇な時間を仕事で潰せて給料も貰えるとあっては願ったり叶ったりである。しかし、残念ながらバイトは僕だけではないのでシフト調整の関係でそうもいかない。

「ま、仕方無いか……」

他のメンツだって金が必要だから働きに来てるのだし、僕だけが文句を言えるはずも無い。それにどっちかと言えば多めに勤務時間を割り当てられているので、この文句はある意味贅沢とも言える。

「まだ時間も早いか……」

時間は夕方六時。さすがに帰って飯を食って寝るには早過ぎる。帰ったところでこの時間じゃ特に興味も無いテレビを見て過ごすか、ネットでサイトの巡回をするくらいが関の山だろう。

「本屋にでも行こうかな」

勤め先のコンビニから、駅近くの商店街へ足を向ける。少し歩くが、どうせ暇だし良いだろう。家賃が安いからと駅から遠い所に部屋を借りたのは失敗だったかなと時々思うが、どっちみち生活の殆どは部屋をバイト先の往復なのだ。

「ついでに晩飯でも食って帰るかな……」

駅前にある飲食店を幾つか思い出し、何を食おうか思案しつつ歩き出す。一人で暮らす事が出来るようになってから、何の目的も無く、ただ生きる為に漫然と生きる。

それがこの僕の、北条崇（ほうじょうたかし）の人生だった。

◆
◆
◆

わざわざ本屋まで足を伸ばしたのはいいが、特に目当ての本があった訳ではない。定期購読している雑誌は無いし、単行本を買い集めるような漫画や小説も無い。

「……我ながらつまらない奴だな」

対外的につまらない奴を演じている自覚はあるが、プライベートまでつまらない人生というのは寂しすぎる。他人と関わらない人生なら、一人の時くらいは熱中出来る何かが欲しい。

ところが、そう思って一人で出来るものを幾度と無く探してはやってみたけど、中々しっくり来ずに長続きしない。携帯ゲーム機の購入も考えた事はあるが、最近のゲームは通信機能を使って多人数で遊ぶ事を想定した物が多く、それを理由に敬遠している。

「仕方無い……飯でも食って帰るか」

何となくで適当な雑誌を買うほど酔狂でも無いし、使わなくていい金は使わない。一人暮らしの身は何かと物入りだし、緊急時には金があった方がいい。たかが雑誌一冊の金ではあるが、こういう物は心構えの問題であって値段云々では無いのだ。

本屋まで来る時間と、何か買おうかと考える時間。暇潰しという目的自体は達成できたのだし、良しとしよう。自動ドアのガラス越しに見える風景は、とっくに夜闇に包まれている。

自動ドアのセンサーに触れて外へ出た瞬間、冷たい風が髪を揺らした。

「寒いな……」

隙間風が入らないように、マフラーを締め直す。晩飯はどこかの定食屋で温かい物を食おう。僕は色とりどりに輝く飲食店の看板を眺め、ぶらぶらと歩き始めた。

晩飯には和風の商品をメインで扱うファミリーレストランで鍋焼

きうどんを食べた。
ファミリーレストランを出て家へ帰る途中、食後で高まった体温が吐く息を普段より強く白に染める。無駄に息を吐いては息の白さを確かめる行為が妙に面白い。
後になって冷静になると馬鹿馬鹿しい事この上無いのだけれど、ツボにハマった時というのは何が面白いか解らない。駅前から少し離れて周りに人が居なくなった事もあって、僕は子供のように息を吐き散らして遊んでいた。
「……ん？」
その時だった。視界の隅にチラリと白い物がよぎった。最初は自分の息かと思ったけれど、よく思い出すとそれが「白い息越しに見えた、より白い物」だったと思う。
「どっちだっけ……」
白い物が見えたと思う方向を見ると、そこには公園があった。公園の入り口には白い石のプレートに「御岳（おんたけ）公園」と彫り込まれている。確か、駅前に行く時によく見掛ける公園だ。
「……おかしいな」
そう、見慣れたはずの公園は妙におかしかった。駅からやや離れている事もあって、この公園は大きめの自然公園になっている。その為に木々が多く茂っているのは当然だと思うが、こんなにも闇が深かっただろうか？
「街灯が切れて……ない」
妙に深い闇は街灯のせいかと思ったが、点々と灯る街灯は皓々と光を放っている。ならば、どうしてこうも闇が深いと感じられるのだろう。
「……」
止せばいいのに、止せばよかったのに、僕は公園に足を踏み入れた。シンと静まった公園の空気に、知らず息を飲む。この辺りは車の通りが少ないとは言え、この静けさは異常だ。
公園内のハイキングコースを一人歩く。不気味な静寂は未だ終わ

らず、自分の呼吸音がハッキリと聞こえる程だ。
「……やばいな、帰ろう」
あまりの静寂に、好奇心よりも恐怖心が勝った。しかし、踵を返して歩いてきた道を逆行しようとしたその時。そこに、誰かがいた。
「こんな所に一人で……何やってんだ？」
そこには、一人の少女が佇んでいた。
ハイキングコースから少し外れた位置にある広場。中央には噴水があるが、今は夜なので水も止まっている。人目を避けてカップルがイチャつこうというならまだ解るが、そこには彼女一人しかいない。
彼女の服は真っ白いコート。なるほど、先程自分の息越しに見えた白い物は彼女のコートだったのか。そんな風に一人で納得していた僕に気付いたのか、白いコートの少女がこちらに顔を向けた。
「……どうしてここにいる？」
「へ？　……え？」
開口一番、彼女は不機嫌そうに眉根を寄せてそう言った。話しかけられた事で彼女を強く認識し、再度その顔を見た。
振り向いた拍子に流れた髪は、白いコートの上にある事でより映える艶やかな黒。眉根を寄せているせいで少し険のある顔になってしまっているが、端正な顔立ちである事は容易に理解出来た。
「……すぐに公園から出て行くんだ、すぐに」
「え、いや、その」
あまり女性らしいとは言えない強い口調。訳も解らずにただ「出て行け」と言われて狼狽する僕を、彼女の目が苛立たしげに睨みつける。その目は鳶色というにはやや明るく、亜麻色に近い。僕と彼女の距離はそれなりにある。それでもハッキリと見えたその目に、僕は引き付けられたように目が離せなかった。
「聞こえていないのか？　早くここから出て行けと……」
彼女は怒ったように声を荒げていたが、その言葉が途切れる。コートの端がはためく程の速さで、彼女は広場の中央に振り返った。

「何も聞くな、何も考えるな、いいから早く出て行け」
「わ……解ったよ」
いくらなんでも初対面の相手にここまで高圧的な態度を取られては気分が悪い。美少女だと言う事を加味しても関わるのは気が引けた。
少女の態度に、鼻を鳴らして踵を返す。興味本位で立ち入っただけで気分を害すハメになるとはついてない。そう思って一歩踏み出した瞬間、ガシャっと大きく何かが割れるような音が響いた。
「な……」
「早く逃げろぉぉぉッ！」
なんだと言おうとした瞬間、少女の怒声が響く。だが僕は振り向いてしまった。言い訳かもしれないが、逃げろと叫ばれて「ハイ逃げます」とすぐさま駆け出せる奴はそういないと思う。
逃げるというのは、脅威を認識した上でやる事だ。何が脅威なのか、それが脅威なのかそうで無いのか。何かが割れたような音だけで全てを認識出来るはずも無い。
「うわ……うわあああぁぁぁぁ！」
しかし、結局それは脅威だった。正しくは脅威というよりは恐怖と言うべきだったろう。そして、その恐怖を認識した結果……僕は腰を抜かしてしまった。

僕の視界の先に、巨大な蜘蛛が浮遊していた。

その姿を見た瞬間、情けないくらい悲鳴も枯れた。
逃げろ、逃げろと本能が叫んでいる。それなのに両足は地面に根を下ろしたように動かない。昔、子供たちが小さくなってミクロの世界を冒険する映画で巨大な蟻と遭遇したシーンを見たが、掌にも余るサイズだったものが巨大である事がここまでの恐怖とは。
「何をしている！　早く逃げないか！」
少女の声が遠い。彼女の叫び声も掠れるほど、僕は恐怖に囚われ

ていた。ああ……蜘蛛が巨大であるだけでも充分な恐怖だというのに、それは蜘蛛ですらない化け物だった。

【ギシャアアアアアァァァァーーーー！】

その生物が、甲高い咆哮を上げた。巨大な腹、八本の足、そこを見れば確かに蜘蛛。しかし、頭があるべきその位置に人間の上半身が生えている。尤も首の上に据え付けられた頭は蜘蛛のもので、より化け物である事を際立たせていたが。

【見……ツケ、タ……ゾ……旅人！】

（しゃ……しゃべった……っ！？）

見るからに化け物じみたソレが、たどたどしくも人語を発した。そいつは僕を意にも介さず少女を八つの目で見据えている。化け物の発した言葉の意味は理解出来ないが、どうやら明確に彼女を目的としているようだった。

【連レテ、イケ……俺ヲ！　連レ、テイケ！】

化け物は叫ぶ。両手を広げ、牙を打ち鳴らし、威嚇するように。僕にはその姿が何故か……懇願しているようにも見えた。恐る恐る少女のほうを見るが、彼女は先ほどと変わらぬ佇まいで化け物を見上げたままだ。

「悪いが無理だ。……私には君を救う術がない。渡る力はあっても、行き先を決める力は持ち合わせていないんだ」

しかし彼女は冷然と化け物の要求に拒絶の意思を示した。僕からは彼女の後姿しか見えていない……しかしその背から感じる気配が、彼女の決然とした表情を容易に想像させた。

【グ……ググゥ……ウゥウ……！】

化け物が唸る。ブルブルと身を震わせ、牙を打ち鳴らす音がどんどん大きくなっていく。直感的にやばいと理解した。まるで爆発する前の爆弾を見るような気持ちと言えばいいのだろうか？本物の爆弾なんて見た事が無いので正しい表現かは解らない。

（やめろよ……刺激するなよ……）

僕は祈るように彼女を見た。場の流れから言えば、恐らくこれ以

上何をしなくてもヤツは爆発する。それでもひょっとしたら、人語を解するのであれば穏便に事を運べるのではないかと淡い期待を抱いていたのだ。
「諦めてくれ」
「……ッ！」
【……ッ！】
僕の祈りは届かず、彼女はにべもなく化け物の要求を斬り捨てた。彼女に思い切り馬鹿と叫びたかったが、恐怖に麻痺した声帯は音を発さず乾いた息を吐き出した。同じく化け物も息を吐き出していたが、恐らくは怒りによるものでは無いだろうか。
【オ…オオァァアアーーーーーッ！】
案の定、決壊した。蜘蛛の体から生えた上半身を振り乱し、怒りの咆哮を上げている。一際大きく叫んだ後、蜘蛛はその場で足を屈めて大きく跳躍した。
（な……なんだっ！？）
周囲の木々が大きくたわむ。化け物の跳躍で震えたソレが見えた瞬間、宙に浮いていたかに見えた化け物は、公園の木々に張り巡らされた巨大な蜘蛛の巣に立っていたのだと理解した。
遠くにあるものは相変わらず見えないが、真上にある木の枝を凝視すれば街灯の光を照り返す細い糸がある。それはあまりにも細く、こんな物が化け物の巨体を支えていたとは信じられない。
「ちィっ」
少女は舌打ちして真正面へと跳躍する。肩口から地面へと飛び込んだ彼女は器用に地面を転がると、先ほどまで自分が立っていた場所を睨みつけた。その空間に一瞬の間を置いて化け物が降ってくる。
【ギシャァァァァァァ！】
ドズン、バキバキと地面を抉り、植え込みの枝を圧し折る音が響く。震えながらも何とか立っていた足は、ここに来てついに力を失った。僕は落ちるように地面へ尻餅をつく。
もうもうと巻き上がる土煙の中で、赤い八つの光が灯った。直感

的もクソも無い、それが化け物の目だと理解出来る。
「ひ……ひぃ……っ！」
尻餅をついたまま、必死に後ずさる。でも僕の両足はアスファルトをガリガリと掻くだけで、その場から僅かにも動いてはいなかった。土煙を割り、蜘蛛の巨体が屹立する。間近で見た異形の姿に、僕の喉が二度目の悲鳴を上げた。
「あああぁぁぁぁーーーーーっ！」
その悲鳴が不愉快だったのか、自分の要求を拒絶された怒りからか。化け物はズシリと地面を揺らして僕の方へと歩を進める。人型の上半身、その左右に生えた腕から巨大な爪が突き出してきた。
ズシリ、ズシリと化け物が歩く振動が地面から僕に伝わる。化け物と僕の距離が2メートルにも縮まった時、ヤツは巨大な爪を振り上げた。ヤツ自身の体液にぬらぬらと光る爪。
（嫌だ、嫌だ、嫌だ……っ）
僕の思考をそれだけが埋め尽くした。這ってでも、転がってでも逃げたいはずなのに、嫌だと思うだけで何も出来ない。そんな自分を歯痒いと思う事も出来ない。ただ、死にたくない。
【ギッ…！？】
巨大な爪が僕の脳天に落ちてくるかと思った瞬間だった。化け物の体がビクリと跳ね上がる。僕は縫いとめられたように見上げていた爪から視線を下げた。何故かは解らないが、視線の先にあるものが僕を窮地から救ってくれると……そう理解していた。
「……彼は無関係だ。巻き込むな同胞よ」
【ギ……グギギィッ！】
そこには彼女がいた。蜘蛛の体の上に乗り、長い刃物のような物を突き立てている。彼女の言葉を理解したのか、怒りの矛先を彼女に向けただけなのか、化け物は上半身を捻って巨大な爪を少女に叩き付けた。
【ギオオオォォォォ！】
「……そうだ。君の相手は私だ」

轟音を伴って打ち込まれた爪を、彼女は後ろに跳躍して躱す。その彼女を追うように、化け物もまた走り出した。
「た……助かった……のか？」
この場から無事に逃げ出すまで助かったとは言い難いかもしれないが、直面していた窮地からは助かった。逃げ出せる、今なら逃げ出せるというのに、僕の足は相変わらず力が抜けたままだった。
「くそ……くそっ！」
喝を入れるように、拳を太ももに打ち付ける。骨に響く鈍い痛みが走るが、足は動いてくれない。幸いにも両腕は動くので、うつ伏せて這いずってでも逃げよう……そう思った僕の耳に、ギャリッと硬い物同士が擦れあうような音が響いた。
「な……なんだ？」
反射的に振り向いて、絶句する。そこには化け物の爪と打ち合う少女の姿があり、彼女が手にしているもの……刃物のように見えたそれは長い木の枝に過ぎなかった。
化け物が植え込みを荒らしたときに砕け散った木の枝なのだろう。末端の枝ではなく幹に近い太さはある。しかし、その程度の物であの化け物の爪が防げるものだろうか？
「威ヤァァッ！」
【ギオオオオオッ！】
少女の放つ裂帛の気合と化け物の咆哮。化け物が持つ人間の上半身と蜘蛛の前肢。そこから繰り出される怒涛の連撃が少女を襲う。触れれば勿論、掠っただけでも危険なはずの攻撃は悉く防がれ、逸らされている。たった一本の木の枝にだ。
「っせい！」
少女が木の枝を突き出す。折れてささくれ立った枝の切断面は杭のように鋭利だ。化け物が爪を合わせて盾のようにかざす。ガリっと硬い音を立て、木の枝が化け物の爪に傷を残した。
（なんだ……何が起きてるんだ？　何をしてるんだ？）
彼女がたまたま手にした枝がとんでもなく硬い枝でした……なん

て事があるわけない。いくら硬い枝だろうが、少女が片手で振り回せるサイズの枝が化け物の質量に耐えられるはずが無い。
（何なんだよ、アイツは！？）
だから、自然とそれは彼女が何かをしているのだという解答に至った。異形の化け物に平然と相対する姿を考えれば、それも不思議ではないと僕には思えた。
「く……っ！」
だが如何に武器が強固であっても運動能力自体は見た目に近いものであったらしい。化け物と打ち合い始めて感覚的には5分程度だろうか……次第に少女の息が上がり始めていた。
化け物が繰り出す攻撃はほぼ間断無く繰り出されている。こちらの運動能力もまた見た目どおりといった所か、疲れを知らないかのように動きを止める事は無い。そのため少女は一瞬たりとも動きを止める事が許されない。
ビィッと高い音を立て、少女のコートの端が切り裂かれる。時が経つ毎に精彩を欠いていく少女の動きは、ついに化け物の射程に捉えられてしまった。少女が忌々しげに顔をしかめる。
「あまり使いたくは無いのだがな……」
少女は呟き、手にした枝を化け物に投げつける。化け物が反射的に振り払ったそれは、いとも簡単に、粉々に砕け散った。
【グ……グ】
その一瞬で化け物は追撃の機を逃したか、少女は先ほどよりも大きく距離を開けている。化け物が動き出す事を待つはずも無く、少女は一気に走り出した。
「な……え！？」
少女の目指す場所は小さな飲食店だった。この公園には、フランクフルトや唐揚げなどの軽食を販売している店がある。彼女が何を思ってそこに走ったのかは解らない。
しかし僕にとって大事なのは、彼女が何を思ってそこを目指しているかでは無い。そこが、僕が座り込んでいる場所からそう離れて

いないという事だ。
「な……なんでこっちに来るんだよおぉぉぉ！」
少女がこっちに走ってくるという事は、当然あの化け物もこっちに来るという事ではないか。
【オオオォォォァァァァァァ！】
やはりというか、化け物は彼女を追って来た。その巨体で風を割り、轟々と音を立てながら。少女と化け物では身体的能力が段違いなのだろう、数瞬で彼女に追いついた化け物が巨大な爪を振り下ろす。
少女は間一髪で爪を避けたが、振り抜かれた爪は飲食店の外壁に置かれたガスボンベの鎖を引き千切る。ガランガランと耳障りな音を立て、ガスボンベがアスファルトに転がった。
「ひいいいぃ！」
転がったガスボンベが足にぶつかり、僕は悲鳴を上げる。反射的に蹴飛ばそうとしたが、もし爆発したらと思い改めた。ガスボンベは僕にぶつかったあと、勢い無くゴロゴロと離れていく。
少し安心した。しかし、ゴロゴロと転がっていくガスボンベと僕の間に……少女がフワリと降り立つ。安堵も束の間、頬が引き攣るのを感じる。何より、少女がここに来たということは。
【ガァァァァァァァァァァァァァァァ！】
当然、あの化け物もここに突っ込んでくるという事になる。
「な……何が『巻き込むな』だよッ！」
地面に伏せて両腕で頭を抱え込む。怪我をするのは仕方ないにしろ、どうか死にませんように。そう祈るくらいしかもう僕には出来ない。
「終わりだ」
「……は？」
化け物が走る爆音の中でも凛と透る少女の声。その声に振り返った時、僕はまたありえない物を見た。今更「ありえない」という言葉も陳腐な響きだが、それでも《それ》は僕を驚かせるには充分な

代物だった。
少女の髪が白く染まっていく。
まるで水の中に絵の具を落としたように。
夜明けの光が闇を駆逐するように。
頭の天辺から、毛の先まで一気に。
後ろ姿に見る彼女の髪は、薄汚れてしまったコートの上でなお映える純白へと変貌していた。少女は転がったガスボンベに走り寄って手を当てる。その行為に意味があるのか解らない。既に化け物は距離を詰め、必殺の一撃を振りかぶっていた。
「すまない……許せとは、言わない」
少女が呟いた瞬間、化け物の動きが止まった。
【ガ……バァッ！】
その直後。バスっと鈍い音がして化け物の胸が爆ぜた。肋骨を四方に広げ、内臓と体液をばら撒いて。振り上げた腕がダラリと下がる。
【ア……アァ……】
化け物は、パックリと開いた己の胸を見て頭を振る。まるで信じられないというように。嫌だ、嫌だというように。蜘蛛の足が力なく折れて……それに倣うように、人の形をしていた上半身がダラリと崩れた。

◆　◆　◆

ガタガタと震えていた。僕に背を向けたままの少女、動かない化け物の死体、公園に残された幾つもの傷跡。終わっていない。この光景が消え去るまで何も終わっていないのだと感じて、僕は震えたままだった。
白髪の少女は、動かなくなった化け物を見据えたまま動こうとはしない。とても声など掛けられる雰囲気ではない……いや、それ以前に得体の知れない少女に声を掛けたいとは思えない。

（に……逃げよう）
そもそも彼女から「逃げろ」と言われたのだから、逃げて悪い事は無いはずだ。しかし……しかしだ。さっきと今では状況が違うのではないか？
僕は知ってしまったのだ。異形の存在を、異形と戦った存在を、彼女の特異な力を。
（口封じに殺される事だって、あるんじゃないのか……！？）
その答えに至った瞬間、更なる恐怖が僕を襲う。感じたとおりだ。何も終わってなんかいない。僕が彼女に見逃してもらえるまで、この光景が見えなくなるまで、何も終わってなんかいない。
【ガ……ァ……】
「！？」
息を飲む事も憚られる静寂を破ったのは、死んだかと思っていた化け物だった。口腔からボトボトと体液を吐き出し、苦悶の声を漏らしながら震える腕を上げる。
【頼ム……頼、ム。帰リタイ、ンダ……】
少女は何も言わない。化け物は……いや、彼は弱々しく懇願した。既に救う術は無いと言われているにも関わらず、何度も必死に。しかしそれでも何も言わない彼女に、彼はついに言葉を失くした。
【ナラバ……頼ム、コレダケデモ、セメテ……コレダケデモ俺ノ、故郷ニ】
そういった彼は、無残に開いた己の胸に自分の手を差し入れた。震える手で取り出されたそれは、ゴルフボールほどの大きさをした球状のものだった。
まるで紅玉のように輝くそれを、少女は黙って受け取る。掌で何度か角度を変え、何かを確認するように球状の物を調べた彼女は、短く彼に答えた。
「……解った、やってみよう」
【オ……オオォ……】
なおも口腔から体液を溢しつつも、彼はその巨大な手で少女の小

さな手を握った。表情は解らない。だが彼が歓喜しているのだと言う事は、気配で察する事が出来た。
「……離すなよ。君の記憶を読み取り、君のいた世界を探知する。何処に送り込むかまでは決められないが……君の故郷には送れる。それでいいか？」
【アア……アリ、ガトウ……】
少女はゆっくりと目を閉じる。球体を握った手に薄い緑色をした柔らかな光が宿った。時間にしてほんの数秒。緑の燐光が徐々に光を失い……開かれた掌には何も残っていなかった。
「私に出来るのはこれだけだ……すまない。君自身を帰す力は、無いんだ」
だが、彼は無言で首を振った。掠れる声で、充分だと呟きながら。彼女の手に添えられていた大きな手が、力を失って宙を泳ぐ。球状のあれは彼の大切な何かだったのだろう。それが故郷に帰ったのだと安心し、今度こそ……絶命したのだ。
「……すまない」
しばらくの間、動かなくなった彼を見上げていた少女は再び謝罪を口にした。緩慢な動きで白いコートのポケットに手を突っ込む。そこから出てきたのは……出て、きたのは。
彼の故郷に送られた筈の、あの球体だった。
「……本当に、すまない。私には……そんな便利な力は……無い」
彼女は最後に嘘をついた。救うことの出来ない彼を、最後の最後で……せめて安らかに逝けるように。手にしていた紅い球を、彼の胸にそっと戻す。
「出来るならば、本当に君の世界へと送ってやりたいが……当ての無い旅路だ。嘘をついたことは謝る。だが……あの世まで大事に持っていってくれ」
風が強く吹き、白い髪を揺らして彼女は空を仰ぎ見る。
異形の死体を前に、彼の死を悼んで。
ただ帰りたいと願っていた彼に、死を与えた事を悔やむように。

ジャリっと砂を踏む音がして、少女が動いた。呆けていた僕には砂利を踏む音すら大きく聞こえる。少女がこちらを向いたことで、事態がこちらに向いた事を理解する。

先ほどまでは戦いを見ていただけの傍観者だったが、今度は僕が少女と相対する当事者だ。

「ひ、いっ……！」

恐怖で喉が萎縮し、途切れ途切れな悲鳴が漏れる。弾かれたように、僕は化け物の死体から少女の方に目を向けた。本当は、背を向けて一目散に逃げ出してしまいたかった。それをしなかったのは、それが出来なかったのは、あの異形の死体のせいだろう。

死にたくない、殺されたくない。背を向けて逃げれば、そのまま殺されるのではないかという恐怖。対峙して考えれば、この状況を脱せるのでは無いかという考え。その二つが僕の思考を満たし、結果として振り返る事を選んだ。

「……あ」

瞬間、僕は彼女に目を奪われた。たった今まで恐怖に震えていたのに、それを忘れてしまう程に、僕は彼女に見入った。いや、魅入られた。数秒前まで考えていた、命乞いの台詞が抜け落ちてしまうほど。

少し強く吹いた風に踊る白い髪。

夜目にも鮮やかに映える金色の眼。

そして、その金の宝石から流れる一筋の涙。

蒼い月光に照らされた涙の筋が淡く光っている。彼女の背後には相変わらず凄惨な死体が転がっているというのに、僕は不思議なくらい彼女にだけ見入っていた。何故だか解らない、何が何だか解らない。

ただ、そんな状況だから僕は思った。雑多な思考が全て吹き飛んでしまったその状況だからこそ、僕は直感でそれを理解出来た。ああ綺麗だと、そう思った。

「……」
彼女は、無表情に僕を見ている。いや、見ているというのは少し語弊があるかもしれない。無表情どころか、魂の抜けたような虚ろな顔で僕の方向に向いている……そんな感じだった。
何とも言えない不気味さが僕を襲う。なまじ彼女が美しいと感じられるだけに、この無機質さが妙な恐怖感を生み出しているように思えた。
「あ……あの」
話しかけるというのは軽率だったかもしれない。もしかしたら、まるで少女の魂が抜けているような今だからこそ逃げるべきだったのかもしれない。話しかけて数秒、何の反応も無い彼女を見て、僕はまさに今こそ逃げ出す時ではないかと思った。
「……え？」
「え！？」
まさにその瞬間だった。僕がそっと足を後ろへと引いた瞬間、彼女の目が疑問符と共に大きく見開かれる。
それは、まるで目の前にあるものが信じられないというように。
自分の見ているものが理解出来ないというように。
彼女は、恐らく先程まで僕が浮かべていたであろう未知への恐怖に歪んだ顔を浮かべていた。
まったく解らない。何故僕はここにいて、凄惨な事件の現場に巻き込まれ、不思議な顔をされなければならないのか。僕が浮かべるべき疑問を、何故彼女が先んじているのか。不意に、少女の唇が緩やかに動く。
「……どうして、僕が」
「？」
彼女の口から、音が漏れた。彼女が何の意図を以ってその言葉を漏らしたのかは、さっぱり解らない。もっとも、彼女に何の意思があっても僕が理解出来そうには無いのだけれど。だが彼女はその言葉を最後に、電池の切れた玩具のように動きを止める。

「あ……ちょっと！」
僕が静止する間も無く、彼女は緩やかに倒れ始めた。反射的に手を伸ばしかけたが、彼女が未だ正体不明の存在である事を思い出して体が硬直した。
ゴツっと硬い音がして、彼女の膝が地面に着く。そのままゆっくり体が僕の方に倒れてきたのを受け止めてしまったのは、硬直してしまったまま避けられなかっただけなのだが……彼女は顔から地面に突っ込む事を免れた。
「なんだよ……何なんだよ……」
気を失った少女にすら、僕は恐怖で身が竦んで動けない。物言わぬ異形の死体が転がるこの空間に、たった一人で放り出された孤独と恐怖。
逃げるんだ、逃げるしかない、今なら逃げられるんだ。
倒れ掛かった彼女をゆっくりと引き剥がし、震える足で一目散に駆け出そうとした。
「……う」
地面に崩れ落ちた彼女を見て、何故か言いようの無い罪悪感が僕を襲った。そんな感情を感じる謂れは無い……しかし、そんな理屈が通用しないのが感情という奴だった。
「その、ご……ごめんな」
気絶したままの正体不明の少女。彼女の体を抱き上げると、近場にあったベンチにそっと横たえる。せめて上着でもかけてやろうかと思ったけれど、こんな場所に自分の身元が割れそうな要素は残したくないし、そこまでお人好しにはなれない。
（もう、関わるな）
僕は自分にそう命じ、今度こそ彼女に背を向けて走り出す。この目で見た物を忘れ去ってしまえるように、あの場所で起きた事を無かった事にするかのように。

……だけど、終わってなんかいなかった。悪夢の一夜なんて可愛いもので終わってはくれなかった。この事件が、この出会いが。彼女が僕を巻き込んで進む、旅の始まり。
僕の上げた悲鳴は、よーいドンの号砲と……何一つ変わらなかったのだ。

第二章【再会、夢の続き】

第二章　【再会、夢の続き】

走る、走る、走る。真っ白な息を吐きながら、後ろを振り返りながら、見慣れた家路をひた走る。真っ直ぐ帰らず、いつもは使わない道もグルグル回って。そんな小賢しい手で上手く撒けるか怪しいが、それでも何もしないよりはマシだと思えた。

彼女は気絶していたし、公園から出た時には追ってきている様子も無かった。多分大丈夫だ。そんな根拠の無い自信で僕は家へと逃げ帰る。

（大丈夫だろう……大丈夫に違い、ない）

息も絶え絶えに、ドアノブに手を掛ける。追いかけられて何かをされるのなら、もうとっくにやられているはずだ。無事に部屋まで着いたのだから、逃げ切ったんだ。僕がそう思ってドアを開くと、

「……遅かったじゃないか。悪いがあまり目立てない身分でね。残念だが君にも死んでもらう」

そこには白髪金眼の少女が待ち構えていた。

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

絶叫して、跳ね起きた。

「あ……あれ？」

辺りを見回すと、ここは見慣れた僕の部屋だった。荒い呼吸を何とか落ち着け、もう一度部屋を見渡す。間違いなくここは僕の部屋で、白い髪の少女など存在しない。

ゆっくり自分の体を見下ろすと、昨日出掛けたままの服装だった。アルバイトから真っ直ぐ家に帰って、そのまま寝こけてしまったのかと……そう思いたかった。

（そうだよ……記憶がハッキリしすぎてる。それに）

袖口に僅かに付着したドス黒いシミ。これは、多分あの蜘蛛の化け物の体液じゃないのか。恐ろしくて、僕は上着を脱ぐと床へと放り捨てた。恐怖を思い起こすそれを、身に着けている事が恐ろしい。
「だらしないな君は。洗濯物くらいちゃんとカゴに入れないか」
「え……あ、と。ごめん」
凛とした声で僕を咎める声がした。なるほど確かに、理由が理由とは言え床に服を放り捨てる行為がいいものとは言えない。こんな事で叱られたのも孤児院以来だな、と僕は布団から体を起こし……起こしかけて固まった。
「まあいい、君が自分の部屋で何をしようが私が咎めるべきでは無いのかもしれん。さて、朝食は用意しておいたので食べるといい。献立は鯵の干物と味噌汁だ」
「あ……あ、あ」
「ん？　鯵は嫌いか？　益々いかんな。好き嫌いも良くない」
「アンタなんでここにいるんだあぁぁぁぁーーーー！」
彼女のとぼけた答えを吹き飛ばすように叫ぶ。叫ぶつもりは無かったのだが、あまりの驚きとぶり返した恐怖に声が大きくなってしまった。
そこには昨晩の……髪色は元通りの黒に戻っているが、間違いなくあの少女が立っていた。
「この距離で部屋の中だ。叫ばずとも聞こえる」
彼女は僕の大声に顔をしかめる。あまりにも平然と、何も無かったのように、何故彼女はここにいるのだろうか。
「な、なんで。どうして僕の部屋が解ったんだ……」
「うん、解ったというか知ったというか。まあ細かい事は省くが、君の部屋は昨晩知った」
何を言っているかはサッパリ解らないが、とにかく昨日の内に知られていたという事か。おかしい。会ってから碌な会話もしてないし、気絶した彼女を放って逃げた後は誰にも会っていない。自分で言うのも何だが、特徴のある外見でもないので人に聞きながら訪ね

歩いたって解るとは思えない。
「どうして、僕の部屋にいるんだ……」
あまつさえ朝食まで用意して。だが、僕の警戒を他所に彼女はあっけらかんとしたものだった。
「いや、私は受けた義理は返さないと気が済まないタチでな」
「は？」
義理？　そんな物に思い当たるフシは無い。公園で偶然会って、いきなり出て行けと言われたかと思えば化け物との戦いに巻き込まれ、最終的には彼女を置き去りにして逃げただけである。
「私が眼を覚ました時、ベンチに寝かされていた。あれは君だろう？」
「……そういえば、そうだけど」
あれだって気の迷いだ。あの妙な罪悪感さえなければ間違いなく地面に倒れたままの彼女を放って逃げていた。そんなものに感謝されて、ここまで来られた方がもっと心臓に悪い。
「君の気持ちも解る……君から見れば昨晩の生物も私も、等しく化け物だろう。しかし信じてほしい。この行為に他意は無い、君への感謝なんだ」
「……」
少し、居心地が悪い。見た目は普通の少女に過ぎない彼女に、「自分は化け物だ」と言わせるのは何か気分が悪かった。ぶり返した恐怖がプラスに働く事もあるのか、異常という前提のもと、彼女という存在を認めつつある。
「いや……すまない。これも所詮は自己満足なんだろう。感謝を捧げることで、当たり前の礼節を掲げる事で……私はまだ人間なのだと思いたいんだな」
僕の沈黙を拒絶の意思だと思ったのか、少女が寂しげに笑う。……僕はお人好しだと思う。害意が無いというならば信じてみてもいいかもしれない。
強いて言うならば……この自分が人に在らざる者に出会ったという

高揚感と、妙な優越感のせいかもしれない。

用意された朝食を黙々と平らげる。朝食を食うと言った時の彼女の表情はとても嬉しそうでなおかつ可愛らしく、不覚にも見入ってしまった。落ち着け自分、それでも相手は正体不明の存在で、蜘蛛の化け物を殺せる力を持っているんだと言い聞かせて何とか平静を保った。

「なあ……」

「なんだ？」

そして思い出した。蜘蛛の化け物、その異形の死体。パシンと瞬くように、僕の脳裏に映像が焼き付けられた。

「公園……あのままじゃ拙いんじゃないのか？　その、アイツの死体……とか」

死体という部分でつい口ごもる。彼女は彼を殺してしまった事を悔いていたように見える。死体という言葉を出すのは、何故か良くないように思えた。

「……跡形も無く溶解したよ。元々ここの空気は彼にとって猛毒だったんだ……ずっと、辛い思いをしていた」

彼にとってここの空気は肉体を蝕む程の猛毒であり、絶命した彼はその為に溶けて無くなったのだと彼女は言う。しかし、妙だ。生き物が跡形も無く溶けるという事実も妙ではあるが、疑問は……違和感はそこじゃない。

「待ってくれ……なんでそんな『知ってたような』言い方なんだ」

彼女が小さく「しまったな」と呟いた。溶けて無くなったと言えばそれで終わりだったろうに、彼を殺してしまったという後悔からだろう、言わなくてもいい事を彼女は口にしていたのだ。

眉間に指を添え、しばらく俯いていた彼女が意を決したように僕を見た。

「解った、君に話そう。信じられない話だろうが話すだけ話す。……信じたところで君の人生には何の関係も無い話ではあるがな」

何かとんでもなく重たい話が来そうな気がする。さっきまで「意外と美味いな」なんて思っていた鯵の干物は、途端に味がしなくなったように思えた。

◆　◆　◆

「まず、名乗りが遅れて済まない。私の名は和（しずか）。平和の和と書いて和だ。年齢はそうだな……もう四百程になるか」

「……ちょっと待て」

名前はいい。へえ、そんな風に読めるんだくらいで流してもいい。だが四百歳と言われてそうですかと言える訳が無い。目の前の少女、和はどうみても十代。高く見積もっても二十代前半にしか見えない。

「じゃあ何かよ。アンタは何だ、四百年前……えーと、江戸時代くらいから生きてるって言うのか？」

「単純に計算すればそうだな。江戸幕府の終りまで見届けた身だ。慶喜公を見た事もある」

「慶喜公って……」

あまり真面目に勉強した訳じゃないのでうろ覚えだが、彼女の言うところの慶喜公とは徳川慶喜であり、大政奉還だか無血開城だかをやった最後の将軍だったはずだ。

「物凄く胡散臭いんだけど」

「……だから『信じられないだろうが』と前置きしたろう。聞く気が無くなったというなら止めておく」

「いや、続けてくれ」

彼女が何時代の人間だろうが、蜘蛛の化け物を見たのは事実である。多分この話には先があって、聞きたい事はそこにあるに違いない。

「ふむ……何から話したものかな。先ずは私という存在が何故生まれたかという事からか。……君はＡＢＣ兵器という物を知っているか？」

「……いや、あんまり聞かない」
平和な時代だ、無理もなかろうと彼女は肩を竦めた。
「Ａ（Ａｔｏｍｉｃ）　Ｂ（Ｂｉｏｌｏｇｉｃａｌ）　Ｃ（Ｃｈｅｍｉｃａｌ）　の三種の兵器を示す言葉だ。尤も今はＡが原子爆弾に限られないのでＮ（Ｎｕｃｌｅａｒ）　ＢＣ兵器とも言うがね」
更に言えばそこにＲ（Ｒａｄｉｏｌｏｇｉｃａｌ）　を含めてＡＢＣＲ兵器やＮＢＣＲ兵器とも言われるらしいが、放射能兵器は大別すれば核兵器と同類なのでＡＢＣの三種だろう。
「だが今から更に遠い未来……ついにＡＢＣ兵器に続く四つ目の兵器であるＤ兵器、次元（Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ）兵器（Ｗｅｐｏｎ）が開発された」
「待て、待った。なんで四百年前から『今から更に遠い未来』になるんだよ」
「尤もな疑問だ。その解答も含めてもう少し耳を貸してほしい」
「……解った」
どうやら事あるごとに突っ込んでいては話が進まないようだ。ここは余計な事を聞かずにいったん全部聞いたほうが良いだろう。
「次の千年紀を越えても尚、人類から戦争が絶える事は無かった。最早『国』という概念さえ曖昧になり、ただ力ある者同士の争いとなった頃にそれは生まれた。《支配者》を自称する一団が」
随分と偉そうな名だ。力ある者のみが上がれる戦場という舞台。そこで支配者を謳うとあらば、相当な自信が感じられる。
彼女曰く混沌とした世界を統一し、彼等の支配の元で平和を築くなんて謳い文句を掲げたらしい。とんだヒーロー気取りだ。
「突然台頭してきた支配者たちは、その名に恥じぬ力を持っていた。件の次元兵器は勿論、陸上・海上・航空兵器に至るまで他に類を見ない物だった」
そして支配者の振るった猛威は瞬く間に世界を席巻し、彼らは「世界の敵」になったらしい。強力すぎる力は疎まれ、争っていた勢力が協力し合ってでも排さなければならない存在となったのだ。

……恐ろしいのは、その「世界連合」を相手にしても瓦解しなかった《支配者》なる一団である。
「次元兵器は人為的に次元の断層を生み出し、そこに対象物を取り込む事でこの世界から消滅させる。規模は個人から都市、世界まで指定が効く上に汚染の心配も無い……侵略し、支配するには理想的な兵器だったろう」
「……そんなモンがあったなら戦争なんて起きないと思うんだけど」
つい突っ込んでしまったが、おかしな話だ。そんな強力で便利な兵器があれば戦争なんて続ける必要が無い。敵対勢力を丸ごと消せば済む話だ。
「簡単な話だ。次元兵器は強力である反面、使用エネルギーの膨大さから連続使用が出来ない弱点があったんだよ。それも充填に掛かるような時間は一回数ヶ月に及ぶような、致命的なものがね」
更に次元兵器は指定範囲こそ自由だが、指定数は一。一度の使用で一箇所しか攻撃出来ないという制約もあったらしい。
「とは言え強力な兵器である事には変わりない。何せミサイル等と違って発動すれば防げないんだ。そして次元兵器の充填時間を補う兵器の数々もまた強力だったからね」
エネルギーのチャージ時間という弱点は、世界連合にも容易に察する事が出来ただろう。僕の考えた通り、そんな強力な物ならガンガン使ってさっさと世界を制圧すればいいのだ。
そして、世界連合軍はエネルギーチャージ時間の間隙を突いて攻撃を仕掛け続けたのだろう。
「次元兵器以外の物も強力ではあった。しかし世界連合は物量作戦で何とか押し切っていったんだよ。結果、多大な被害を出しながらも支配者の喉下に喰らい付いた……しかし、支配者たちは最後の最後にとんでもない真似をした」
「……」
僕は息を飲んだ。聞いていれば支配者とやらは既にとんでもない存在だった。そんな奴らがとんでもない真似をしたと聞いて、碌な

事をしなかったであろう事は簡単に想像できる。
「彼らは次元兵器を暴走させた。発動は勿論、制御に使うエネルギーすら用いて。……結果、世界連合どころか世界そのものが滅んだ。人類の歴史はそこで終わったと言ってもいいだろう」
「なんだよ、それ……」
負けるくらいなら全てを巻き込んで自爆してやろうだなんて、それはどこまで歪んだ矜持なんだろう。次元兵器という最強のカードをもってしても敗北したという事実は、支配者を自負する彼等には耐え難い事だったのか。
ただ何にせよ、僕がもう生きてもいないであろう未来の事とは言え人類の歴史がそこで終りと言われては心中穏やかではない。
「だがね、問題はその後だったんだ」
「まだあるってのか？」
「そうだ。暴走した次元兵器は無作為に次元断層を生み出し……結果として次元断層はこの世界の様々な時代、そして私たちの知らない別次元へと繋がったんだ」
「じゃあ……あの化け物は」
「お察しの通り、別次元の生物だよ。彼らのような生物はこの世に……この世の様々な時代に流れ着く事になった」
そして、古い時代に流れ着いた者はその奇異な姿を「妖怪」として伝えられる事にもなったという。僕が目撃した彼も、この世界で付けられた「土蜘蛛」という仇名があった。
「私も次元断層に巻き込まれたクチでな。私はごく普通の農民でね……野良仕事をしている最中だったよ、突然空が割れて私はそこに吸い込まれた」
「……それでこの時代に流れ着いた、とか？」
「惜しいところだ。それだけならある意味マシと言える。……私は次元断層の中で、コイツに出会った」
彼女はおもむろに上着のボタンを外していく。慌てる僕を気にした風も無く、片手でグイと胸元を開いた。そこには飾り気の無い白

いブラジャーが見えていたが、慌てて目を逸らす前に……そこにあった異形に目を奪われた。
「それ……なんだ？」
彼女の左の乳房よりやや上、白い肌にジワリと広がる薄黒い染み。その中央には、蒼い単眼を爛々と光らせる……蛇のような生き物の頭部が浮かび上がっていた。
「自律戦闘兵器《神威（カムイ）》、その核となる生物だ」
「カム……イ……？」
「そうだ。かつて《支配者》が自分たちを神だと称し、その威を示す為に生んだ兵器だ」
彼女の胸元にある蒼い単眼は、まるで彫刻のように動かない。このままなら特殊メイクか何かと言われれば信じるだろう。
「次元断層の中でね、未来から吹き飛ばされたであろうコイツにぶつかった。そのショックでかな？　私はこの世界に押し戻された……無事にとは行かなかったのだがね」
「……何が、あったんだ？」
「まず私はコイツがぶつかった時に体内に潜り込まれ……神威にされた。そして、次元断層に巻き込まれたせいかは解らないが……私は死ねない体になったんだ」
そんな馬鹿な事があるものかと、話を聞いただけなら笑い飛ばせる。しかし僕は「土蜘蛛」を見ている。そして、その土蜘蛛を殺害せしめた力が「神威」としてのものであるなら。そう考えれば解らなくは無い。
そして体内に巣食った神威には意思と記憶があったのか、彼女はその小さな生物から未来で起きた事実と次元断層に関する知識を吸収したという。
「以来、私は旅をしている。神威の力か、次元断層に巻き込まれた副作用かは知らないが、私は次元断層の発生を感知出来るんだ」
「……次元断層の場所を探してどうするんだ？」
僕の言葉に彼女は笑った。先ほどの寂しげな笑顔とは違う、何か

の決意に満ちた凄絶な笑顔を浮かべている。
「次元断層を辿って、未来へと進む。……次元兵器を作り出す直前の未来まで至り、その存在を無かった事にする。そして私は……人として死にたいんだ」
その答えに、僕は言葉を無くした。
過去から生き続け、未来へと生き続ける。
その目的は死ぬ事だと。
生きる事が素晴らしい事だとか、死んじゃダメだなんて所詮は凡人の観点かもしれない。生きてる理由が見つからないから死にたいとか、そんな事を軽々しく口にするバカな奴らをネットなんかでよく見てきた。
「……そう、か」
でも、彼女は違う。
彼女が本当に人間じゃなくて、何百年も生きてきたというならば。
その長い時を一人で生きてきたならば。
知り合った人間が老いて死んでいくのを見てきたならば。
僕は、彼女が死を望む気持ちを否定したりは出来ない。不謹慎だが、その願いが早く果たされるようにと願ってもおかしくない。
確かに僕も一人で生きている。でもそれに耐えられるのは、いつか僕自身も老いて死ぬというゴールがあると解っているからにすぎない。彼女には……そのゴールが用意されていない。
「その……なんだ、上手く行くといいな」
「……君はこの話を信じるのか？」
僕は皮肉でも何でもなく、本心からそう言った。それを察したのか、彼女は不思議そうに首を傾げた。まさか信じてもらえるとは思って無かったのだろう。
「……話だけ聞いてればね。でも僕は『土蜘蛛』を見たし、アンタの力も見た。だったら、そういう事もあるかもしれない」
「優しいな、君は」
そう言って彼女は再び微笑んだ。寂しげでも無ければ凄絶でも無

い、初めて見るごく普通の笑顔。それがあまりに普通すぎて、途端に現実感が強くなる。照れくさくて僕は目を逸らした。
「悪いんだけどさ、前を閉めてくれないか？　その……目のやり場に困る」
「うん？　ああ、そうだな。見苦しい物を見せたままで済まない」
彼女からすれば胸元にある神威の核を指しての事かもしれないが、単純に胸元が肌蹴たままの女性が目の前に居ては精神衛生上よろしくない。
僅かな衣擦れの音を背に、僕は彼女がボタンを閉めるのを待っていた。
「待たせたな、すまない」
振り返った時には来たとき同様の格好に戻っていた。……聞き入っていたとはいえ、一時なりともあられもない姿のままで話を続けさせていたのだから申し訳ない事だ。
「さて、そして君の最初の疑問……何故彼の事を『知っていた』のかという話だ。私が使った力は見たな？」
「……ああ」
土蜘蛛の凄惨な死に様を思い出し、少し胃から込上げてくる物があったが何とか我慢する。
「私に備わった力は次元と時空に干渉する能力だ。あの時使ったのは転送能力（テレポート）の一種でね、幾らか制約はあるが物資を任意に転送する事が出来る」
聞けば、土蜘蛛と戦った時はガスボンベの中身……圧縮されたガスを土蜘蛛の体内に送り込んだらしい。つまり土蜘蛛の中でガスが一気に膨張した結果、内側から爆破されたという事か。
「強力な力ではある……しかしペナルティもあってね、この力を使うと周囲の生物が持つ記憶が流れ込んで来るんだ」
「……記憶？」
「ああ、これは中々の地獄だぞ？　まったくの他人が経験した記憶を自分の記憶のように見せられるんだ。力を使った量にもよるが、

下手をすれば精神崩壊が待っている」
　そこで合点がいった。つまり彼女はあの土蜘蛛の記憶を体験する事で、彼の歩んだ人生の一部と共に苦痛すら共有した。
初めて会った時、彼女の発した「……どうして、僕が」は僕の記憶を共有した事で、自分を僕だと錯覚したという事か。
「ご明察だ。あの時の私は自分を君だと錯覚していた……もう一人の自分が目の前にいたように思えたのだろうね」
　更に言えば、僕の記憶を吸収したのだから部屋の場所など解って当然という事だ。
「……今までにも、そんな事が？」
「あったよ。しかし人間の脳は他人の記憶を取り込むだけの容量が無い……精神崩壊のリスクはすぐに気付いた。だから可能な限り力は使わないようにしている」
「戦わなければ良いんじゃないのか？」
「……残念ながらそうもいかん。次元断層から戻った事で、私は断層を感知出来る代わりに似たような周波を発しているようだ。そのせいで次元断層絡みで相手から寄ってくるのさ」
　彼女自身を次元断層と勘違いするか、または次元を統べる力があると勘違いして関わってくるか……そのどちらであろうとも、彼女に拒否権は無いという事だ。
例の土蜘蛛を見ていれば解る。あれ程に切羽詰っていれば、何とかして欲しいという希望だけが先走り彼女の意思を確かめる余裕なんて無くなるだろう。
「些か余計な事も話してしまったが、話せるものは大体これで全部だ」
「あ、ああ。うん」
　正直狐につままれたような気分だが知りたい事は知る事が出来たし、僕の命に危険が無いという事も解った。やっと安心出来た気分だ。
「……さて、恩義も返す事が出来たし君を安心させる事も出来たよ

うだ。私はそろそろお暇させて頂くとしよう」
「え？　ああ、行くのか？」
「うん。言ったろう？　私がここにいてはまた厄介事が起きかねない。君の為にも早々に退散するさ」
その言葉に、少し罪悪感を覚えた。現金な話だが、僕にとって安全な相手であると解った事で情が移ったのかもしれない。傲慢な考えかもしれないが、彼女の人生を聞いて同情の念を覚えてしまったのかもしれない。
だって、規模も深さも時間も段違いだけど……彼女も僕も、独りじゃないか。
「近く、この街のどこかで次元断層が発生する。不用意に出歩くなよ」
彼女はコートを羽織り、玄関に向けて歩き出す。僕は、その背中に声を掛けることにした。
「解った。でも、なんだ。僕もバイトとかで出掛ける事もあるし……えーと、まぁ会ったら缶コーヒーくらいは奢るよ」
それくらい良いんじゃないかと僕は思った。彼女は長い時を生きてきて、これからも長い時を生きていく。その中で、ちょっとくらい思い出があったっていい。思い出して、そんな事もあったなんて笑えるような思い出が増えたっていいじゃないか。
僕の申し出が余程意外だったのか、彼女はキョトンとした顔だった。
「ふふ……そうだな、じゃあもしも会えたらご馳走になろう」
でも、僅かな時を置いて彼女は嬉しそうに笑った。じゃあな、とドアを開けた彼女を玄関で見送る。少しの間彼女の背を見送っていたけど、彼女は振り返る事無く街角へと消えていった。
玄関から部屋に戻る途中、コンロに掛けられた鍋に目を留めた。ちゃんと作られた味噌汁なんていつ以来だろう。夕飯はスーパーかコンビニで適当な惣菜を買うにしても、この味噌汁は晩もありがた

く頂こう。
僕が彼女の話を聞いたのは、安心したかったのも理由だけれど……遠い昔に忘れた温もりを感じさせてくれた礼かもしれない。
「……サンキュな」

僕は、今はいない彼女に感謝の言葉を呟いた。

第三章【異変、逃れざる檻】

第三章　【異変、逃れざる檻】

「……」

「……ん？　どうした？」

例の少女が僕の部屋から立ち去って二日。彼女は僕の横で缶コーヒーを飲んでいた。また会う機会があればとは言ったし、この街にいるならすれ違う事くらいはあるかもしれないと思っていたが、少し早すぎないだろうか。

「しかしだな……そう広い街でもない。私からすれば自宅とバイト先から距離のある場所に行けば再会の確率は高いと思うぞ？」

「確かに僕の行動範囲なんてそう広くは無いけどさ……」

アルバイトの夜勤明け、その晩は連続で夜勤という事も無く、寝て一日潰すのもちょっと惜しいかと思った僕は街へ出た。もちろん特に目的があった訳でもなく、また適当に本屋にでも行こうかと思っていた程度のものだ。

別段面白い事が無ければ帰って寝るのもいいし、ひょっとしたら偶然彼女とバッタリなんて事もあるかもなんて考えていたことも否定しない。実際バッタリ出会ってしまい、何故だか妙に嬉しかった事も認める。

「……アンタ、暇なのか？」

「一概に否定できないのが悲しい所だな。次元断層の位置に凡そのアタリは付いたが、そうなると断層が開くまでは暇と言わざるをえん」

むう、と彼女は眉根を寄せる。硬い物言いの割には両手で缶コーヒーを飲んでいたり、意外と可愛い所が見れて眼福ではあるが、僕としては彼女の気を害したい訳ではない。

「ごめん、悪気は無かった」
「いや、こちらも怒っているという訳ではないんだ。気を遣わせたな」
彼女は驚いたようにパタパタと手を振った。どうやら僕の発言で機嫌を悪くしたという事ではないらしい。しかしそこで、彼女が口元に手を当ててフムと思案する。
「もし……もし良ければで良いんだが、『アンタ』では無く名で呼んでくれないか？　思えば久しく名を呼ばれていないのでな」
「いや、それくらい別に良いけど。えーと……和、だよな」
「……」
名前を呼ぶくらいならお安い御用だ。以前聞いた名前を確認しつつ、彼女の名前を呼ぶ。僕の呼びかけに、和は目を閉じて聞き入っているようだった。
「あの……和？」
「ああ……すまない。ふむ、やはり名を呼ばれるというのはいいものだな」
そういって和は柔らかく微笑んだ。見るからに嬉しそうで、僕も何だか嬉しくなってしまう。
「じゃあ、僕の事も名前で呼んでみてくれよ。バイト先じゃ苗字でしか呼ばれないからさ」
僕には呼んでくれる友達なんていないし、わざわざ名前で呼ばれるために院長先生に会いに行くほどって訳じゃない。僕の記憶を読んだ和なら、そこも察してくれるだろう。
「いいとも。私の名を呼んでくれた礼だ、ありがとう崇」
子供の頃以来、院長先生以外から名前を呼ばれた事なんて無い。こうやって、同じような目線で、友達を呼ぶみたいに名前を言われたのは本当に久しぶりだった。
なるほど、確かに悪くない。苗字で呼ばれるよりも少しだけ距離が縮まったような、仲の良い関係であるような、そんな気分にさせられる。

「ふふ……君も嬉しそうだな」
「そうだな」
自分の頬が緩んでいる事が解った。バイト先で作ってるような愛想笑いじゃない、本当に嬉しいときの顔だと自分でも解る。
だけど、素直に嬉しいと思える事は……彼女がいずれ消え去る人間だと解っているからだ。こんな気持ちを、ずっと持って居たかった。彼女が普通の人間で、もっと別の出会い方をしていたら……そんな事を考える。
でも僕の人生は僕の知るとおりで、起きなかった「もしも」に意味なんて無い。裏切りを恐れる僕は……居なくなってしまう事が解っている相手にだからこそ、深く情を寄せる前に消えてしまう彼女にだからこそ、普通に笑えている。それが少し悲しい。
「なあ、崇」
「ん……何？」
「私が得た君の記憶は、そう多くない。精々今から一年前後の記憶だ……だから、君が独りであろうとする理由は……見つけ出せない」
そんな事まで解るのかと僕は驚き、そして見透かされた事が少し恥ずかしかった。
「君はまだ若い。強制はしないが……もう少し人に歩み寄ってもいいと思う。孤独は本当に寂しくて、辛い。……ずっと独りでいた私からのアドバイスだ」
「含蓄があるね……説得力抜群だよ」
わざとおどけたように肩を竦めた僕を、和は咎める事無く見ていた。僕は、何故か和の言う事なら聞いても良いように思えていた。不思議と抗えないというか、彼女の言葉には逆らえない何かを感じる。
僕より数百年長く生きている人生の大先輩だからかと思ったけど、女性相手に歳だ年月だと言うのも失礼かと思って僕は口を噤んだ。
「なあ……その次元断層が開いたら、そこから旅に出るのか？」
「そうだな……今回開く次元断層が私の望むものでは無いかもしれ

ない。未来への道か、別次元への入り口か……開くまでは判断できん」
　和が小さく溜息をついたのが見えた。どうやら次元断層にも当たり外れがあるらしい。恐らく過去にも同じ事を何度も繰り返し、外れを引いては落胆した事も少なくは無いはずだ。
「……それ、入ってみないと解らないってこと？」
「いや……幸い神威（こいつ）は優秀でね、未来への帰巣本能とでも言えば良いのかな？ちゃんと未来へ続くものを教えてくれる。まったく知らない世界へコンニチハ、なんて事は無い。五年、十年といった間隔だが着実に未来へと飛んできてるんだ」
　和は人差し指でトントンと左胸を叩く。四百年という時の中で、十年単位の未来移動なんてそれこそ慰め程度にしかならない。ましてや次元兵器の完成は次の千年紀を越えるというのに。
　それでも和にとってそれは確かな一歩なのだ。いや、もしかしたらこの先に何百年も一気に飛べるような次元断層が見つかるかもしれない。僕は暗い未来を無理矢理飲み込んだ。彼女に必要なのは、希望なんだ。
「はは……じゃあ僕がおっさんになった時に、この街から飛んできた和に会う事もありえるって訳か」
「無いとは言い切れないな。その時は君に心許せる友人がいる事を願っておこう」
　余計なお世話だよ、と僕と和は笑いあった。この時間がとても楽しくて、とても悲しい。彼女なら……僕は友人であってもいいと、そう思う。
　だけど彼女を信じることが出来るのは、彼女が時を旅する者だから。僕の知る現実の外側にいる人間だからこそ知り合えて、話し合えたのだ。だから、この思いは思いのままで終わる。
「別れの時はさ、見送らせてくれよ。僕はこのまま普通に生きていくけど……和と会った事をちゃんと覚えておきたいんだ」
「……ありがとう崇。気持ちは嬉しい、とても嬉しいよ……だけど

次元断層に普通の人間が近付いてはいけない」
「そ……っか」
ちょっと、心が痛い。和が僕を心配してくれた事なんて考えるまでもない。だけど、断られるという事実が……拒絶されるという事実がどうにも苦手だ。それは、とても嫌な記憶を思い起こさせるから。
だけど、僕のそんな気分はあっさり見破られたようだ。場を暗くしないように気遣ってくれているのか、彼女は笑顔を浮かべていた。
「崇、良かったらこれを受け取ってくれないか」
「え……と、何だろ」
和はコートのポケットをごそごそと探ると、そこから小さな物を取り出した。何だろう、昔気まぐれに眺めた本にあったような気がする。確か、根付とかいうものだ。
「ほう、詳しいじゃないか」
「……たまたまだよ」
細い朱色の組紐の先には銀色の鈴が揺れており、その先には木彫りの猫が二匹ぶらさがっていた。和は、片方の猫を取り外すと僕に差し出す。
「昔手に入れたものでね、とても気に入っている」
「……じゃあ大事なものだろ？　いいのか？」
「うん、受け取ってくれ。……なあ、私はまた長い時を旅する。君といる事は出来ないだろう……だが、たった一時であっても君と友人でありたいと思うんだ」
何だろう。すごく悲しくて、嬉しい。僕はこんなにも脆かっただろうか？　まだこんなにも何かを思えるのか。
「君が会えなくなる事を裏切りだと思うなら仕方無い。だけど、私は会えなくなっても君を信じていたい。私の身の上話を聞いてくれて、私の名を呼んでくれた君を」
僕の手をそっと持ち上げて、掌に小さな猫を置く。包み込むように添えられた和の両手が、僕の手を握らせた。

「これからどれだけ長い時を歩んでも、私は君を忘れない。そして願わくば君も私を忘れないで欲しい……どうか、信じて欲しい」
君の歩む新たな人生の、最初の友人とさせてくれ。彼女がそう呟いた時、僕の目からはどうしようもないくらい涙が溢れていた。
「うん……僕も忘れないよ。忘れようったって忘れられない」
「済まないな、確かにショッキングなところから見せてしまった」
確かにそれもある。だけどそれ以上に、僕は忘れないだろう。月光の下で輝いた白い髪を、ほんの一時与えてくれた懐かしさを、もう一度誰かと笑えた嬉しさを。
「お別れまでに、またこうやって偶然会えたら……また缶コーヒーでも奢らせてくれ」
「そうだな……また、会えたら」
次に会える保証は無い。ひょっとしたらこれが最後になるかもしれない。だけど、それはやっぱり悲しいので僕は「さよなら」を口にしなかった。
和も同じ事を考えてくれていたのだろうか、僕と同じように「さよなら」を言わないでいてくれた。本当にそれは感傷で、気分の問題で。それでも同じ気持ちを共有できたのは、本当に嬉しかった。

だけど、さよならを言わなかった事は奇しくも正解だった。僕らはもう一度出会う事になるからだ。それも、血生臭い地獄を伴って。

◆　◆　◆

夜中に突然目が覚めた。起きた直後なのに、あの重たい瞼の感覚は微塵もない。妙にクリアな視界が、オレンジ色に光る自室の常夜灯を捉えた。
「……なんだ？」
和と別れたあと、結局睡魔に勝てなかった僕は布団へと飛び込んだ。幸いにも今晩は夜勤が無いので明日の朝までグッスリ眠る気だ

った。時計の針は午前一時を指している。
「変だな、なんで……こんな時間に」
起き上がった僕は、何故か辺りを見回していた。見える景色は見慣れた僕の部屋でしかない。しかし、浮かんだ疑念が次第に形を変える。それはまるで靄のように胸の中を満たしていった。
妙だ。居ても立ってもいられないこの焦燥感。正体不明の不快感に困惑したまま、とりあえず僕は頭を冷やそうと冷蔵庫から水を取り出そうとした。
「あ……」
その時、冷蔵庫の上にあった《それ》と目が合う。キーホルダーとして部屋の鍵に付けられた物、和に貰った木彫りの猫と。
僕の意識が和という存在に思い至った瞬間、靄のようだった不快感はざわめく水面のように姿を変える。水中の魚達が一斉に跳ねて水面を叩くような騒がしいざわめき。虫の知らせなんて可愛いものじゃない。僕は居間へ駆け戻ると、外出着に着替えて外へと飛び出した。
部屋に鍵を掛けるのももどかしい。気だけが急いて、鍵穴に上手く鍵が刺さらない。
「ああもう、クソっ！」
ガリガリと捻じ込むように鍵を差し込み、ガチャっと激しく音を立てて施錠する。いつもならドアノブを何度か捻って施錠を確認するのだが、僕はそんな暇も無いと走り出した。
（なんでだ……っ？）
何の脈絡も無く夜中に起き出し、正体不明の不安に襲われた。何故だか解らないが、それが和に関係があるように思えてならない。
まさか、次元断層が開いたのか？　彼女との別れを惜しむ僕の心がこの直感を与えたのか？
人気の無い道路を駆け抜ける。バイト先の道を走りぬけ、見知った本屋の店先を突き抜けて。僕の口から漏れる息は、後ろへ後ろへ

と流れていく。流れていく景色は、あまり馴染みの無いものに変わりつつあった。

（……こっちだ）

なのに、僕は立ち止まる事も無ければ迷うことも無く夜の街を疾駆する。不思議と、闇へ闇へと走れば正しい道へ進んでいると実感した。あの日、和と会った公園を包んでいた不気味な闇だ。それが、大気を汚す澱のように淀んでいる場所が所々に見えていた。

は、は、は。

肺が酸素を高速で、大量に取り込んでいく。もっと取り込め、もっと吐き出せ、体中に酸素を巡らせろと、見えない何かが僕に命令している。それに応えるように、体の内側から改造されているかのようだ。

家からずっと走ったままなのに、不思議と呼吸は乱れていない。あの不安が僕の中の何かを麻痺させているのだろうか？　街灯の間隔は徐々に広がり、次第に人が少ない場所へ進んでいる事に気がついた。

「なんだ……ここ、か？」

ゆっくり足を止めてその建物を見上げる。そこには、大きな工場があった。街灯に僅かに照らされた外壁は崩れに崩れ、そこかしこの窓が割れている事から既に廃墟になっていると判断出来る。僕の視界を、白い湯気が遮る。ずっと走り続けた体はかなりの熱を蓄えていたようで、吐き出す息は長い時間大気を白く染めていた。それを見て、僕は意識的に呼吸を整える。

（入れそうだな）

立ち入り禁止の看板が掛かっていたが、随分放置されていたのか鎖は茶色く錆びて垂れ下がっている。幸い有刺鉄線が張ってもいないし、警備システムなんて上等な物も無いように見える。錆びた鎖を跨ぎ、僕は敷地内へ侵入した。

正面の巨大なシャッターにはビッシリと錆が浮いており、開きそ

うな気配はまったく無い。シャッター横の通用口にも鍵が掛かっているようで、ドアノブを回すとガチガチと硬質な音を響かせるのみだ。

（どっか入れそうな所は……）

通用口の薄汚れたガラスはかなり大きめで、叩き割れば簡単に進入出来そうではあった。しかし廃工場というだけで、管理は今でもどこかの会社がしている可能性がある。面倒ごとはなるべく避けたい。

どこか中へと入り込める所は無いだろうか。鍵を掛け忘れた扉があれば良いし、同じガラスが割れた窓やドアにしても始めから割れているなら問題無い。

（……ん？）

少し大きい工場とはいえ外周を回るだけなら二十分もあれば良いはずだ。そう思って暗闇の中で壁を辿って歩いていた僕の耳に何かが聞こえた。

動きを止めて耳を澄ます。自分の息さえ邪魔に思えて、僕は息を止めて周囲に聞き耳を立てた。息を止めて数秒、とても小さいが……ガンと何かがぶつかる音がした。

「……どっちだ！？」

壁に手をついたまま、真っ直ぐ突き進む。電気の通っていない廃工場は真っ暗で、僅かに光る月明かりくらいしか光源が無い。伸び放題の雑草を踏み分けて敷地内を走り回っていた瞬間、視界の端を夜空が掠めた。

「中庭か！」

建物と建物の隙間に夜空が見える。どうやらこの工場は中央に広場があるようで、そこを囲むように建造物がある。

僕は建物の隙間に体を捻じ込んだ。そう広く無いが人が通るには充分な幅がある。恐らく空調の室外機を置くスペースだろう、土埃を被った四角い箱が幾つも並んでいた。

「よし……中庭からならどこかに入れるかも……」

ひび割れたコンクリートの床を踏み抜いて、一気に中庭へと駆け込む。出掛けにちょっと躓いたせいで、思い切り前につんのめった。
「うわっと……あ、危なか……った……？」
何とか体制を立て直して僕は前を見る。……そして、絶句した。そこには確かに僕の求める人がいた。捜し求めていた和がいた。
ただし、地面に倒れ付して。真っ白なコートを所々赤黒く染めて。
「し……和ぁっ！」
叫んで、駆け出そうとした。だが和は僕の存在に気付いた所で弱々しくこちらに手を突き出す。大きく広げられた掌だけで、それが「来るな」という意思表示だと解った。どうして、と叫ぼうとした瞬間……聞き覚えの無い声が場に響いた。
【おや……お友達ですかね？　クフェフェフェフェ……】
イヤに甲高い、そしてどこか人を馬鹿にした響きを含む声だった。反射的に目を向ける。この場に入った瞬間に和を見つけた為に意識出来なかったが、そこには見知らぬ誰か……いや、何かがいた。
「なんだよ、おまえ……」
視線の先でそいつは相変わらず嫌な笑いを上げている。その姿は、例の「土蜘蛛」と同じく異形。サイズはせいぜい人間並み、しかし体表には装甲状の物が幾つも張り付き、その隙間を真っ白な体毛が埋め尽くしている。
狐。
首の上にある物を見て、直感的にそう思った。獣の口をいやらしく吊り上げるソイツの背では、炎のように揺ら揺らと揺れる数本の尾があった。……なんだ、コイツみたいな奴を見た事がある。本屋か何かで。
「九尾の狐だ……」
僕の疑問に答えるように、地面に伏せたままの和が言った。九尾の狐……よく漫画や小説だと、最凶最悪の妖怪として書かれる事が多い大妖怪の名前。そのイメージが僕の中を支配し、一気に恐怖が襲ってくる。

ヤツの名を言ったあと、和が小さく咳き込む。咳と共に地面に吐き出されたものが、地面に小さく赤いシミを作った。
「おい……おい！　和！」
【ンンー……？　大丈夫ですよォ？　その子は化け物なんで死んだりしませんからァ】
だからってあんな風に痛めつけていいって道理は無い。和を見れば解る、死なないだけで痛覚が無いって訳じゃないんだ。
「畜生……なんでそんな風になってんだよ！　不老不死なんだろ！？」
和はようやく体をこちらにむけて転がった。僕は更に言葉を失う。真っ白だった彼女のコートは、恐らく彼女自身のものであろう血でベッタリと濡れていた。
「ふふ……残念ながら私は不老不死というだけでね、代謝能力は普通より少し良い程度なんだ。どんな傷でも、人並みの時間を掛けて治すしかない……中途半端な代物だ」
「なんだよそれ……！」
不老不死や不死身と言うと、どんな傷も気持ち悪いくらい早く治るようなイメージがあった。ビデオを逆再生するようなイメージのアレだ。だが、そうじゃない。彼女の不老不死はそんな便利なものじゃない。
「遠い、昔ね。自分が化け物になったと解った時に……首を掻き切って死のうとしたんだ。その時に気付いたんだよ。血が沢山抜けて、死にそうなのに死なない。結局自分の血溜まりに伏せたまま、三ヶ月もかけてやっと傷が塞がった」
失血死してもおかしくない程の血を流してなお死なず、人並みの回復力でなんとか傷が治り、馬鹿みたいな時間をかけて血の量が戻る。そんなの、普通に耐えられるはずがない。
「だから、私は未来へと旅するんだ。……もう、こんなのはゴメンだからね」
「そんな……そんなのありかよぉ……」

ガクガクと膝が震える。和になんて言ってやればいいか解らない。せめて、助け起こしてやりたい。あの狐ヅラから逃がしてやりたい。そう思っているのに。

【だァかァらァー、内臓とか脳みそは何もしてませンでしょォ？動けなくなるのはイイですけどォ、喋れないのは困りますからねェェ？】

震える僕なんてどうでも良い様子で、狐が笑った。それがあまりにも癇に障った。怒りのおかげか、ようやく僕は狐に向かって叫ぶ事が出来た。

「お前も何なんだよ！　どうせ次元断層絡みなんだろうけど……ここまでするのかよ！」

それでも怖いものは怖いが、震える声で僕は何とか狐に向かって怒鳴りつける事が出来た。

【とは言いましてもォォー。そこのお嬢さんが私の言う事は聞けないって言いますしィ？】

しかし狐はまったく悪びれず、悪いのは和と言わんばかりの態度だった。恐怖に怒りが混ざり、震えは更に強くなる。なのに、コイツは土蜘蛛すら倒した和をここまで痛めつけられるという事実に、僕は動けないでいた。

ギリと歯を食いしばり、涙目になって奴を睨み付けるしかない。そんな僕への言葉か、それとも憎らしい狐野郎への言葉か、和が呻きながら言葉を発した。

「当然だな……人間を家畜か何かのように扱おうという輩に協力する気は無い」

「なん……だって？」

驚愕する僕に、和が言葉を続ける。

「崇……別次元の住人の大半は、自分の世界へ帰る事を望む者が大半だ。あの、土蜘蛛のようにな」

「……」

「だが、ソイツのような奴ら……人間より優れた力を持つがゆえに、

我ら人類を下等生命と見做して調子にのる輩もいる」
和の言葉に、狐の目元が少し歪んだ。
【しょうがないでしょォ？　貴方たちが家畜を飼って殺すのと同じィー。今度は食われる側になっただけでしょうにィィ】
そう言った瞬間、狐の手が軽く空を薙いだ。それを見た和が両手を前で固めて防御の姿勢をとる。ガギンと怪音が響き、彼女の体が弾き飛ばされた。
「な……何をしたんだ」
傍目には、目に見えない何かが和を吹き飛ばしたようにしか見えない。何とか防御したようだが、地面に倒れた人間を更に吹き飛ばす攻撃が並大抵の威力とは思えない。
【それ、鬱陶しいなァ……触れた物の時を止める能力かァ。ま、いいけどさァ……衝撃まで殺せるわけじゃないしィ？】
見れば、人間一人を吹き飛ばせる威力の攻撃を止めたにも関わらず、防御したコートは破れてすらいない。
【時を止めると言う事はァ、壊れるという「時の流れ」から解放される。すごいよねェ、カッコイイねぇ……でェェェもォォねェェェェ？】
ニタニタといやらしい笑いを浮かべた狐の手が、連続で空中を薙いだ。先ほどと同じ不可視の何かが、またも和を襲う。ガギンガギンと硬質な音が何度も炸裂した。
「ぐ……うぅ……！」
【ソレ、ショックまでは防げないよねェ？　重い重ォい力でブっ飛ばされたらァ……そのコートで殴られてるのと変わらないんだよォォォ？】
不快な金属音を連続させて、和の体が中に跳ね上げられていく。僕の身長よりも高く持ち上げられた後、更に上から叩きつけられるような力で地面へと叩き落される。
「か……は」
和の口から、先ほどより量の多い血が吐き出された。その姿を見

て、狐はやれやれと頭を振った。人を馬鹿にした、演技がかった動きだ。
【ねェ？　諦めて次元断層に案内してよォ？　後は私がやるからさァー？】
「コイツ……何を言ってるんだ？」
クフェフェフェ、と狂気じみた笑いを上げる狐に僕は怖気走った。
「か……かはっ……崇、そいつらは次元断層を探す力が無い代わりに、そこにあれば開いて辿る力があるらしい……」
開いて、辿る。辿る？　何を？　いや、何処へ？　いや……解答を予測する為のピースは、さっきまでの会話で充分拾えているんじゃないのか。
人間を下等だと見下す生物。
今度は食われる側になったという言葉。
土蜘蛛のように、彼の世界があって、彼のような生き物が多数いるとして。僕の脳味噌が嫌な答えを弾き出しかけたその時、和がその答えを形にした。
「ここ暫く、公園や市街地で変死体が発見されるという話を聞いた事は無いか……？　犯人はコイツだ……！　死体はコイツの食い残しって訳だ！」
思い出す。いつかネットのニュースサイトでそんな記事を見た。僕は、震える体で狐の方を見た。関わり合いになりたくもない殺人鬼の姿を、何故か見てしまった。
【そうだよォォォ！　仲間をいっぱい連れてきてェ！　ここを私たちの牧場にするのさァァァ！　大丈夫だよォ！　ちゃァんと管理して、順番に殺して食べるよォ！？　「いただきます」も「ごちそうさま」も言ってあげるからさァァ！】
大気を震わせて狐が叫んだ。正解です、よく出来ましたというように。僕の膝は、いよいよ限界という所だった。ガタガタと震え、膝同士がゴツゴツとぶつかっている。腰を抜かしてへたりこんでいないのは、もう奇蹟と言って良かった。

【うーん、でもねェ……そろそろ意地を張られても面倒臭いんだよねェ】
狐は、ピタリとその狂気を収めた。でも、その切り替えの早さが逆に怖い。次の瞬間にはまた狂気に走り、また和に攻撃を加え始めてもおかしくない。
「なら……諦めて失せろ」
和が狐を睨み上げる。だが、地面に倒れ付したまま和は狐にとってどれほどの脅威でも無いらしい。まるで羽虫を払うように、ガギンともう一度和を跳ね飛ばした。
「あ……が」
先ほどまではかろうじて受身らしきものを取っていた和だが、もう殆ど力が残されていないのか、成す術も無く地面に叩きつけられていた。その姿を見て、狐は飽き飽きだと言わんばかりに肩を竦める。
【もォいいよォ……便利な力を持ってるからァ、ちょっとは穏便にって思ったんだけどォ……メンドクサイから引きずっていくねェ？】
狐の化け物がパンと掌を打ち鳴らす。その直後、ズシンと地面が揺れた。
「な……何をしたんだ？」
その疑問に答えるように、中庭に積まれた廃材が鳴動する。砕かれたコンクリートの塊が、ブツ切りの鋼線が、電源も通らないケーブルが、中庭に中央に這ってくる。
鉄骨を文字通りの骨に。
ケーブルや鋼線を筋繊維に。
瓦礫やコンクリート破片を皮膚に。
僅かな時を置いて、そこには廃材で組み上げられた巨人が生まれていた。
【はァいはーい、じゃあその子を連れてきてねェ】
狐の命令が聞こえたのか、瓦礫の巨人が動き出す。狐は、とっくに僕の事なんて見ていなかった。連れ帰った和を如何にして使うか

を思案するほうを優先したのかもしれない。
「く……あぁ！」
瓦礫の巨人が、無遠慮に和の髪を引っ張って持ち上げた。和が上げる苦悶の声など意に介さず、主である狐の下へ踵を返す。和は髪を引っ張られる痛みを堪えて何とか踏みとどまろうとしていた。
「あああっ！」
和は自分の髪を掴むと、瓦礫の巨人が掴んでいる髪束に手を巻きつけて引っ張る。相手の体が尖った瓦礫や破片で出来ていたのが幸いか、突起で擦れた部分がブチブチと音を立てる。掴まれていた部分近くで髪が千切れた。
重力のままに地面に倒れる和。僕は震える足を押さえつけて、何とか彼女の元へ走り寄ろうとしていた。だが彼女が抵抗を続ける事を余程面倒と思ったのだろう、狐は瓦礫の巨人へ非情の命令を下した。
【面倒臭いなァ……いいよ、もう。両手足潰しちゃってもさァ】
「なに……言ってんだ？」
狐の言葉に、僕は心が凍りついた。潰すって……何を？　誰の？
反射的に和の方を見た。倒れる和の手足を凝視する。馬鹿な、嘘だろう？　だって、あんなにも細くて、瓦礫の巨人に掴まれただけで折れてしまいそうなのに。
「や……やめろよ」
ズリ、と靴の底を引きずってどうにか一歩前へ出る。だが巨人は僕をまったく無視して和に向かって歩き出す。
「やめろ……やめろよ」
走れ、走れ、走れ。瓦礫の巨人が、ゆっくりと腕を振りかぶるのが見えた。パラパラと小さな破片が落ちる。大人の頭くらいはありそうな拳。
あんなものが和の手足に落ちたら、きっと彼女の細い手足は粉々になってしまう。漫画みたいな再生機能なんて無いのに。そんな風に粉々になったら、未来永劫そのままで生きなければならないのに。

巨人の拳がピタリと動きを止め、次の瞬間には振り下ろされる。
そう解った瞬間、僕は駆け出していた。
「やめろよおおぉぉぉぉ！」
逃げろと、彼女の唇が動くのを見て。それでも僕は走り続けた。

『化け物』

（……え？）
瓦礫の巨人へと突っ込む途中。僕の意識が白く染まった。
（……なんだ？）
目の前へ、瓦礫の巨人が少しずつ迫ってくる。あと少し、もう少し。僕は滑り込むように和と巨人の間へ飛び込んだ。
『化け物！　化け物！　化け物！』
誰かの声が聞こえる。それはとても昔に忘れてしまった、とても大事だった親友の声。振り下ろされる瓦礫の鎚。そこに、何故か白い乗用車が重なった。僕は、それを覚えている。忘れてしまったはずのそれを、よく覚えている。
道路に飛び出した僕。
甲高いブレーキ音を立てて突っ込んでくる車。
僕は、そのまま轢かれ……いや、轢かれそうになった僕は。

――ボンネットに両手を叩きつけ、その反動で跳躍した。

白く霞む過去の記憶でバンッと響く金属音。
月光に照らされた廃工場にゴキンと響く石の音。
二つの世界で重なった音と共に、巨人の腕が僕の掌で止められた。掌に伝わる鈍い感触と低い音。骨が砕けた音かと思ったがそうじゃない。瓦礫の塊は、この腕の形を変える事も出来ずに止められていた。
白い世界で、遠い昔が幾度も瞬く。僕は高く跳んで、地面に着地

した。コンクリートを踏み割って。逃げる車の音を背中に聞いて。
そのまま、公園から僕を見ていた親友たちを見た。目があった。怯えている。泣きながら、地面に座り込んで。あの時も……あの時もオレは。
『ガ　アァ　アアアァァァ　ァ　ァァーーーッ！』
こんな風に、咆哮した。
白かった視界が一瞬で晴れる。代わりにやってきたのは炎のように真っ赤な視界とノイズ混じりの風景。そこには不恰好な鉄クズ人形がいる。
『いつまでオレに手ェ乗っけてんだテメェ……』
パキパキ、パキパキと何かが乾く音がする。
掴んだままの手を強引に振り払う。ブチブチと鈍い感触が伝わり、巨人の腕が千切れた。手に残った残りカスを捨てると、ガラゴロと地面を転がっていく。
『カ……ハハ……カハハハハッ！』
ビリビリ、ビリビリと何かが破ける音がする。
オレはどうしようもなく楽しくなって、右手を思いックソ後ろへ引く。ぶん殴る。ぶっ飛ばす。粉々にする。目の前に立ってるクズの塊をだ。
ブチ壊す。そう考えるたび、体に力が漲るのを感じた。ほォら、あと少しだ。右手に力が溜まるの感じる。ガチガチと鋼が鳴く音がする。
「崇……君は……いや、君も」
ベキベキと、何かが歪んで固まった音がした。
地面にヘタったまま、和が何か言っている。もう少しだ、もう終わる。待ってろよ、今からコイツも狐野郎もブチ殺してやるから。右腕に溜まった力はもう臨界に達した。あとは気持ちよくブっ放せば終わる。
『死ィねえええええ！』
真っ赤に染まった視界が更に赤く染まる。ガリガリとノイズ交じ

りの視界、とんでもない不快さと、とんでもない快感を伴って右腕が巨人の腹に向かって突っ走る。
「神威か」
　気のせいかもしれねェが、和の声には驚愕と……何でか悲しさが混じってるように聞こえた。
瓦礫の巨人が体のド真ん中から粉々に砕け散る。吹き飛ぶ破片とコンクリートの塵。その向こうで、驚愕に獣ヅラを歪めるヤツが見えた。
【何だよォ……お前、同類だったのかよォ……！　失敗したなァ、女のほうをいたぶり過ぎて呼んじゃったって事かァ……！】
　何を言ってやがるか解らねェが、狐はさっきまでの余裕を無くしたようだ。まあイイ、そんな事はまったく興味がねェ。あとはあの狐を縊り殺せば万事解決だ。
『ビビってンじゃねェぞ狐ちゃんよォ……和にやってくれた事ァまとめて返してやる。泣いて命乞いすりゃあスッキリ殺してやるぜ？　なァ！』
　大気を割って、オレの声が響き渡る。狐野郎の耳には相当効いたのか、不機嫌そうに目元を顰めていた。だが、ヤツからは何の答えもない。……だが、どうでもいい。命乞いが無いってェならそのままブチ殺せばそれで終りだ。
「待て！　崇！」
　とすん、とオレの腰に軽い衝撃が走る。見下ろせば、和がオレの腰に抱きついていた。
「ダメだ崇！　戻れ……こんなはずが無い、君がそうであっていいはずが無いんだ！」
　……彼女が何を言っているのか解らない。クソむかつく狐を殺せるってェなら是非もない。なのに和はどうしてこんなにも必死なんだろう。ガリガリと、視界のノイズが増していく気がする。どうにも気分が悪い。
【いいよ、ここは譲るとするさァ……でも、次元断層の場所は絶対

に教えてもらうからねェェ！】
『……ちィ！　待ちやがれ狐野郎ッ』
反射的に狐野郎に突っ込もうとしたが、腰に抱きついたままの和が邪魔で動けやしねェ。出遅れた一瞬の隙を突いて、狐野郎は大きく跳躍すると廃工場の影へと消えた。クソッタレなことに、あの最悪野郎を逃がしてしまったらしい。
『オイ、和よォ……邪魔すんなって。あのクソを殺しゃあ万事ＯＫじゃねェよ』
見下ろすと、和はオレの腰に抱きついたまま顔を伏せている。そこでオレは異常に気付いた。……オレの身長は、和をこうやって見下ろせるくらい高かったか？ゆっくりと両手を上げてみる。そこには、見た事の無い掌があった。
ガリガリとノイズが走る。
何だ、コレ。ガキの頭くらいなら握り潰せそうな掌。指の先についた、杭みてェなデケェ爪。恐る恐る和の肩にそっと手を置いて、ゆっくりと引き剥がす。俺の力が強いのか、和にもう力が残っていないのか。彼女はあっさりと離れた。
ガリガリガリガリ。ノイズは段々デカくなる。
見下ろした体は、鎧なんだか殻なんだか解らないモンでびっしり覆われている。足にもやっぱりクソでかい爪が付いていて、体中のそこかしこに金属の珠なんだか生き物の目なんだか解らない物がうっすら光っていた。
『おい……オイオイ何だよコレ』
後ろへ一歩よろめいた。コケちまわないように足を踏み出すと、ズシンと重々しい音が響く。またその音を聞くのが怖くて、オレはもう一歩も動けなくなった。
「……」
ようやくオレを見上げたくれた和の顔は、何とも言えない顔をしていた。戸惑ってるような、泣き出す寸前みたいな、怒り出す直前みたいな、そんな顔だった。

『し……和……？　コレは、オレは何なんだ……！』
「……君は」
和が少し俯く。前髪で隠れて目は見えないが、何とか見えた口元では唇を噛み締めているのが見えた。言わなければならない、言うしかない、それなのに……言えない。まるでそんな葛藤と戦うように、和の肩が小刻みに震えている。
ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ。いよいよもってノイズが視界の隅々までも覆い尽くす。ああ、畜生。気付いてしまう。まるで熱が冷めていくように、暴力的な感情が萎えて僕が帰ってくる。
思い出す。何故オレはあんなモノに立ち向かった？　どうして戦えた？　僕は何故あんなにも好戦的だった？　あんな事が、今までオレに出来たか？
「崇、君は……」
ヤバい。ヤバい。致命的な奴が来る。今までのオレを粉々にするデッケェのが来る。そしてオレは見た。見てしまった。所々割れたガラスに映ったオレ自身の姿を。
青白い炎の鬣（たてがみ）。
炎と同じ色で光る眼。
剥き出しの白い牙。
白銀の爪。
黒銀の巨躯。
地面を撫でる鞭のような尾。
「人間じゃない。自律戦闘兵器『神威』……その完成体だ」
ノイズが止んだ。
真っ赤だった視界は、まるで霧が晴れるようにいつもの色を取り戻す。
「うああ……うわあああぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーッ！」
両手で頭を掻き抱き、まるで泣き叫ぶように。

僕は夜空に向かって咆哮した。

第四章　【思考、進むべき明日】

第四章　【思考、進むべき明日】

暗い。真っ暗な部屋の中で、僕は膝を抱えたまま蹲っていた。部屋のカーテンは閉めたまま。闇に慣れた目で捉える時計とカレンダーが正しいならば、あの廃工場から帰って三日経った計算になる。

居間のテーブルに放り出されたままの携帯。不在着信を示すランプが点滅している。……僕に掛かってくる電話なんてアルバイト先くらいしかない。でも、僕はこの三日間のバイトを休んでいた……無断で、だ。

日々の殆どをバイトで過ごしていた僕は、シフトの大半を出勤で埋めている。そんな僕が三日間もいきなり休めばどうなるかは解ろうものだ。二日目の夕方くらいまではひっきりなしに鳴っていた携帯は、もうピタリと鳴らなくなった。恐らく、クビだろう。

――あの、廃工場。

そこで見たもの、そこで経験したものを思い出して僕は顔を伏せた。抱えた膝に顔を埋め、強く目を閉じる。何も考えたくない……思い出した物を、もう一度無理矢理忘れ去りたかった。忘れ去ろうという行為が、それを思い出す行為であると解っていても。

フローリングの床が、キシっと音を立てた。音の主が誰かは解っていたので、僕はずっと顔を伏せたままだった。

「崇……食事は、いいのか？」

「……」

和の声にも、僕は何も返せない。本当は腹が減って仕方が無いのに、食事をしたいとは思えなかった。普通なら、ここで「食べなければ体がもたない」などと食事を勧められるだろう。しかし和は「解った」と短く言うと、居間の隅に腰掛けた。

僕が知った事が本当なら、どうせ食事なんて摂っても摂らなくても一緒なのだろう。三日前の晩、僕が彼女に聞いた事が本当なら。

◆　◆　◆

あの廃工場で狐が逃げたあと、僕も部屋へと逃げ帰った。あの暴力的な意思が抜けた途端、化け物の体が元に戻った。皮膚は硬度を失い、肥大化した部分や獣の爪牙は塵のように崩れていった。

地面に膝を着いたまま呆けていた僕は、和が自分のコートを掛けてくれた時でやっと思考能力を取り戻した。コートの隙間から吹き込む風に体が震える。どうやらあの姿になった時に、服は破れてしまったらしい。

「……行こう」

あわやその場で泣き崩れてしまいそうだった僕に、和が短く言葉を掛けた。おかげで何とか涙を堪えることが出来たので、またも夜闇を疾走して帰ってきた訳だ。

その時もまるで疲れる事は無く、自分自身が信じられない速度で夜の街を走り抜けた。あの、獣の巨躯を思い出す。……僕はもう根本的に人間じゃない物になってしまったのかと思うと、堪えたはずの涙が頬を伝った。

幸い、財布や携帯の類は和が拾い集めておいてくれたらしい。窓を叩き割って部屋に入る事は免れた。しかし、見慣れた部屋に戻った所で僕の焦燥は一向に晴れない。当たり前だ、僕はまだ信じたくなかった。恐らくは何か知っているであろう和に問いただし、日常へ戻る事を望んでいた。

「和……答えてくれ！　僕は……僕はどうなったんだ！　アレは……何だったんだ！」

僕は和の両肩を強く掴んだ。答えを急いたつもりは無い、無理矢理聞き出そうとした訳でも無い、僕はただ……彼女に縋った。安心

したかった。現実から……逃げ出したかった。
和はその唇を固く引き結んだまま一言も喋らない。それが、辛い。口にする事で僕に止めを刺してしまう事が解っているから、何も言えない。その沈黙が、既に肯定であると解っているのに。
「和……頼むよ、何か言ってくれよ……」
俯いたまま懇願する僕の手に、そっと和の手が重ねられた。暫くは置かれていただけだった彼女の手が、僕の手を強く握る。それが彼女の決意を示すサインだった。
「言った通りだ……君は私が知る未来の兵器、自律戦闘兵器《神威》の……完全体だ」
「嘘だ……嘘だろぉ……」
全身から力が抜けて、膝が地面に落ちる。和の肩を掴んだ手は、彼女の腕をなぞるように這って地面に落ちた。決定的な答えを聞いて尚、嘘だ嘘だと僕の心が繰り返す。
何もかも嘘で、与太話で、このまま眠って起きれば何も無かったみたいに昨日までの日々が始まる……そう思いたかった。
和と出会った晩、土蜘蛛を見ていなければ。
廃工場で狐面の化け物を見ていなければ。
……月に照らされた、自身の化け物じみた姿を見ていなければ。
そうやって逃げ出せた筈だった。掌をそっと持ち上げた。ずっと見慣れた自分の手だ。何の変哲も無い、子供の頃はカッターや木の枝で簡単に傷付いた手だ。あんな瓦礫の化け物を殴り壊せるような手じゃない。
「もう……戻れないのか？　人間に戻って、普通に生きられないのか……？」
彼女は、何も言わない。きっと何を言っても傷付けてしまう……そんな悲壮な沈黙だ。だから、僕は敢えて答えを促した。先ず、知りたかった。知りたくない気持ちも、聞きたくない気持ちも当然ある。それでも、何も知らずに悲嘆に暮れるのは嫌だった。悲嘆に暮れるだけの材料が欲しかった。

僕の言葉に和は意を決したのか、大きく息を吐き出す。彼女はその場に腰を下ろし、僕に視線を合わせた。
「残念だが……人間に戻るとか戻らないじゃない……そもそも君は人間じゃない。そういう風に作られた兵器なんだ」
「……！」
大概の事は覚悟していたつもりだったが、僕は絶望のドン底に突き落とされた。淡い期待も何も無い。持つべき希望が始めから無いと、そう言われたのだから。
「なん、だよ……それ」
乾いた喉で、何とか声を絞り出す。どうしようもない吐き気で途切れ途切れになった言葉はまるで嗚咽のようで、泣いているような声に聞こえた。
「……私の神威が持つ記録とあの姿は合致している。何より、今も神威同士が共鳴しているのを感知している。……この時代に君がいた理由は憶測の域を出ないが、未来からの漂流者である事は間違いない」
和は僕に向かって話を続けるか否かを問うた。正直、人間じゃないという事で充分ショックだった。これ以上何を聞いたところで意味は無い。残っているのは僕が化け物だという事実だけだ。
それでも僕は彼女に先を促した。それは、どうせ絶望するなら底の底まで行ってしまえという自虐以外の何物でもない。
「……僕はどうしてここで生きてるんだ？」
「……次元兵器の生んだ断層に巻き込まれたとしか思えない。神威は本来なら人間の胎児と融合させた後は、培養槽で短期間の育成を促される……尤も、培養槽が無くても人並みの速度で成長する事は出来る。培養槽が無くても死ぬわけじゃない」
「僕も和と同じように、死なない体なのか？」
「いや、神威は不老不朽であっても不死じゃない……指揮個体とのリンクが無い限りは個体性能や再生能力も著しく制限されるからな、外部からの破壊でなら死亡する。……私が不死なのは次元断層内の

空間に取り込まれていたことに起因する物だろう」
　要するに、死にたければ殺されるか自殺しろという事だ。生きる事に先が見えず、死にたければ自ら死ぬように仕向けなければならない……僕は、生きるも死ぬも苦痛の選択肢を選ばなければならないというのか。
「僕は……どうなる？」
「君の肉体は二十歳前後で成長が止まり、以降は融合している神威が君を兵器としてベストのコンディションを整え続ける……5～6年は誤魔化せても、肉体が老いる事のない君はいずれ周囲から怪しまれる……だろうな」
　人間のフリをして生きていくことも無理。つまり人間から距離を置いて独りで生き続けるか、自ら命を絶つか。それとも化け物として開き直って生きていくか。
「なあ……死んだ方が良いのかなあ」
　弱りに弱った僕の心は、普段なら言わないような最悪の弱音を漏らす。もう絶望的だった。死ぬ事で楽になれるなら、それが悪い事とは思えない。
「自殺するな」とか「死んじゃダメだ」なんて理屈は、もう僕に適用されなくてもいいじゃないか。だって僕は化け物で、人間ではないのだから。
「……すまない、私にはそれに答えることは出来ない。君の生死を判断する事は出来ない……したくない。残酷だが、如何なる命でも選択権は自分にしかないんだ」
　和は永遠を生きるからこそ、死ねるという事実を幸福と答える事も出来る。
　和は永遠に死なないからこそ、生きる意義を求め続けている。
　その葛藤を抱いて数百年を生き抜いた彼女の言葉は、僕に重く圧し掛かった。結局、この命を……化け物の命をどう扱うかは、僕にしか決められないのだ。僕は何も言えなくなって、ただ蹲るしかなかった。

「すまない……」
彼女の謝罪の声にすら何も返せず、僕は俯いたまま泣いた。

◆　◆　◆

最悪の現実を知ってから三日間。結局僕は何一つ答えを出せないままで居た。壁に背を預けたまま眠り、起きても殆ど動かず。
空腹感というリアリティはまだ僕が人間だと言う事を教えてくれているけれど、食事と言う行為もその内必要無くなるらしい。嗜好として摂る分には問題無いらしいが、やろうと思えば僅かな栄養分からエネルギーを自己生成できるという。
人として生きてきた誇りを胸に、生きよう。
人として生きてきた誇りがあるうちに、死のう。
化け物としてでも生きていたい。
化け物でいるくらいなら死んでしまいたい。
そんな葛藤を、闇の中でグルグルと繰り返していた。居間の隅では、和が小さく寝息を立てていた。……無理もない。狐との戦闘後、彼女は一刻も早く休みべきだったのに僕を気遣っていた。
僕から目を離すのもかなり心配だっただろう、二日目の夜中までは一睡もせずに僕を見ていてくれたのだ。僕がベッドから起き上がり、毛布を掛けてやっても起きる気配は無い。
「……ごめん」
起こしてしまわないように小さく呟くと、足音を忍ばせてそっと玄関へと向かう。寒風が吹き込まないように小さくドアを開けて、隙間から体を押し出す。居間を伺うと、僕が動いた事に気付く事無く和は昏々と眠り続けていた。
なるべく音を立てないように鍵を掛けると、表の様子を伺う。ずっと暗闇の中にいたので昼夜の感覚が麻痺していたが、外はとっくに夜闇に包まれていた。三日前と変わらない、吐く息を白く染める冷たい世界だ。

部屋で着ていた服はそのままで、寒気が肌を刺す。だが、このままで良い。特に気にする必要は無い。
「……僕は、どうしたらいいのかな」
鍵を郵便受けの中に隠す。部屋を背にして、僕は街へと歩き出す。とりあえず考えたかった。今まで生きてきた街を見て、溜め込んだ思い出を確かめて。部屋の暗闇で悩んだ時間はループを繰り返して煮詰まらなかったから、答えが欲しくて僕は街へ飛び出した。
パキパキと何かが乾く音がする。
そっと頬を撫でると、カツンと硬い音がした。指の先も、同じくパキパキと乾いた音を立てている。その指先に、分厚い白銀の爪が生まれつつあった。
「……もう、そう意識すれば出来るのか」
ビッと布地が裂ける音がする。次第に音が連続し、ビリビリと服が悲鳴を上げた。
肌の色は徐々に黒く染まり、生物の物とは思えない光沢が生まれ、黒銀に輝く。やがて肉体の変化に耐え切れなくなった服は、ただの布キレになって地面に舞い落ちた。ああ、わざわざ着替えなくて正解だ。
『……ッ！』
無言の咆哮に応えて、オレの頭に青白い炎の鬣が生まれた。ボンッと派手な音を立てて広がった炎が踊るように揺らめいている。まったく、冗談じゃねェ生き物だ。
地面を蹴って走り出す。一歩の間隔が馬鹿みてェにデカく、脚を踏み出す旅に加速が増していく。歩数にしてたったの七歩。十にも足りないその歩数で、景色が線に見えるくらいの速度になった。
『ガアア　アアァ　ァァァアアァッ！』
夜闇を引き裂く咆哮を上げて、オレは跳んだ。地面を蹴り、ブロック塀を蹴り、民家の屋根を蹴り、ビルの屋上を蹴って。オレは、高く高く跳躍した。

光が流れていく。街灯の明かりが、ビルの窓から見える電灯が、車のライトが。家屋の屋根やビルの屋上を高速で疾駆するオレの目に、流れる光はまるで線のように見える。

「何の音だ？」

「……さあ？」

そんな会話が地上から聞こえ、一瞬で後ろへと流れていった。超高速で屋根を駆け抜けている体は、実のところそれなりの重量がある。ガツンガツンと屋根を蹴っていれば、そりゃあ派手に音も鳴るだろう。

この頭に燃え盛る青白い炎の鬣はかなり目立ちそうなモンだが、なるべく人目に触れない場所を走っている事もあってまだ人に見られてはいないようだ。

『人目を避ける……ねぇ』

人としての平穏な生活はもう望めない今、そんな気遣いは無駄なのかもしれん。事実、こうやって街を走り抜けるだけで自分が化け物だと実感出来る。どうせならバレてギャーギャー騒がれたほうが面白ェんじゃねえのか。

『……どうもこっちになると強気でいけねェな』

人か化け物か、生きるか死ぬか。迷いの答えを求めて待ちに出たってぇのに何を考えている。オレはビルの屋上を一気に蹴ると、見る限り一番デカい建物を目指した。

そこは、一面ガラス張りのデカいビルだった。恐らくはどこぞの大企業のオフィスビルなんだろう。外壁に張り巡らされた大きなガラス窓が夜景を映し、建物自体が巨大な美術品にも見えた。

明かりの消えた窓の前を選び、屋上まで一気に跳ぶ。いくらビルの屋上から屋上を跳んできたとは言え、さすがにこのビルは高すぎる。

しかし、この化け物の体にそんな事は関係無いようで、「跳ぶ」のが無理だと思えた瞬間、「飛ぶ」事を選んでいた。

脚と背でバキバキと何かが蠢く感触がしたので、脚に目をやる。するとそこにはロケットの噴射口みてェなモノが出来上がっていた。ソイツはオレが想像したとおり、激しく火を吹いてオレを空中へと押し上げる。

『神威、ね』

赤い識別灯が明滅する屋上。僅か数秒でそこへ降り立ったオレは、化け物じみた力を再認識して溜息を零した。屋上の縁まで歩き、眼下の街を見下ろす。そこには車のライトが生み出す光の川がある。

時間にするとまだ夜の7時程。歩道に行き交う人々には家族連れもチラホラ見掛けられた。その姿に目を細める。オレが知りもしない、手に入れる事も出来ない姿を。

街の一部に目を向けて意識をそこに集中する。するとそこを四角い照準が囲い、クローズアップした。それを幾度か繰り返す事で、恐らくは数十メートルは先にいるであろう人々の表情までも目視出来ている。

『体温、暗視……生体反応』

テレビや漫画で見た単語を口にして、そう見たいと考えるだけでオレの視界が目まぐるしく変化した。それこそ映画などで見覚えのある視界が展開される。なるほど、未来の人間はどうだか知らんが、オレにはこう見えるのか。

自律戦闘兵器《神威》か。あらゆる局面に対応した武装、性能にその場で自己調整を行なう万能兵器。融合者の意思をほぼタイムラグ無しで読み取り、実行するもう一つの命。

未来で支配者と次元兵器を支えた守護兵器であり、世界連合に牙を剥いた破壊兵器。オレの中に巣食う化け物は、俺の知識と想像力を元にこの体をあらゆる兵器に造りかえる。北条崇の人生には不要の、手に余る力。

眼下に見える世界。

それを見ている自分。

どう考えてもそれらは相容れる筈も無く、化け物として生きるに

は狭すぎる世界だった。力を隠してなら生きていけるだろうか？
それも最初だけなら耐えられるかもしれない。だが知り合う人間が老いて死に、それを見送り続ける事に耐えられるだろうか？何より、老いずに生きている自分に耐えられるだろうか？
『死ねるってェ事を選べるのが唯一の救いたァなあ……』
和と違って、オレはまだ死ぬ事が出来る。和が言うには、戦闘力に持ち得る力を注ぎ込んでいるせいだか、不良品を廃棄出来るようにだか知らねェが死ねるようには出来ているらしい。今すぐ元の姿に戻ってここから飛び降りればあっさり死ねるってェ寸法だ。
『オレはどうすりゃあいい』
（僕はどうすればいい）
オレの中で、自問自答を繰り返す。結局どこへ行こうと迷いは消えないのかもしれない。オレが独りで悩んでいるだけじゃあ、結局は同じなんだろう。かと言ってこんな事を相談して誰が信じる訳も無く、相談できる相手だって居やァしねえんだが。
「警察、警察を呼べーッ！」
不意に、そんな声が聞こえた。一瞬、自分の事がバレたのかと思ったがそうじゃない。傍目に不審者なのは間違いないとは言え、地上数十メートルの高さにいるオレをそう簡単に見られるはずは無い。
『……なんだ？』
聴覚に意識を集中し、音源を探る。平穏とは遠い悲鳴と怒号、そういった物にターゲットを絞って耳を澄ます。優秀な化け物の耳は、程なく音源を探し当てた。
目標に意識を向け、視界をクローズアップする。照準に切り取られた世界が次々と映し出され、目標の姿を捉えた。
刃物を振り回す若い男。悲鳴を上げて逃げる人々。男の足元に倒れている女性。刃物についた赤い血と、倒れた女性の服が赤く染まっている事から既に暴れたあとらしい。
「おまえら皆死んじまえ！　死ね！」
男は叫び散らしながら刃物を振り回している。このまま放ってお

けば足元の女性が危ない。斬られたのは腕のあたりらしいが、このまま更に刺されるかもしれねェし失血死もありえるだろう。
『……ちィ』
ツイてねえなと思うが仕方無い。オレはビルの縁を蹴って一気に跳んだ。脚と背に付いてる噴射装置のようなモノを駆使してビルからビルを駆け下りた。
このまま衆人環視の中に飛び込めば、刃物を振り回すキ〇ガイに加えて化け物が揃う。そうなりゃあますますパニックになるのは当たり前だが、それでも警察が来るまでに始末をつけられる力が今のオレにはある。そんな陳腐な、人間だった頃の正義感。
『……まだ、北条崇として終わっちまうワケじゃない』
いや、ここで力を振りかざすことで本当に終わっちまうのかもしれない。しかしまあ、残念ながら既に現場は足元に見えている。バカな男の頭上数メートル上、着地まで数秒ってェトコだろう。
コンクリートを踏み砕き、派手な音を散らして男の真後ろに着地する。当然、男より先に周りの人々がオレに気付き……、
「なんだ……アレ」
そして絶句した。そりゃそうだろう。明らかに人間に見えない巨体が空から降ってきてビビらねェ奴はそういない。着地体勢から立ち上がって青白い眼光で周囲の睨み付けた瞬間、それこそ火がついたようにキャーキャーと甲高い悲鳴が連鎖した。
「なな、なんだコイツ！」
周囲よりも少し遅れて男も漸くオレに気付いたようだった。流石に得体の知れないオレにいきなり刃物を突き立てて来る事は無く、むしろ逃げようと距離を取ろうとしていた。賢明な判断ではある。
『待て』
逃げようとする男の手を掴む。手にした刃物ごとガッチリ握りこみ、男が逃げるのを無理矢理止めた。それなりに力を加減して掴んでいるつもりだが、男からすれば相当痛いらしい。ヒィヒィと情けない悲鳴を上げながら必死に腕を引き抜こうをしていた。

『おまえにちょっと聞きてェんだけどよ。何でこんな真似してンだ？　アレか？　世の中が嫌になったとかそういう奴か？』
依然として未知の存在であり、恐怖の対象ではあるとは言え会話が通じるというのは大きな安心であるらしい。男は相変わらず逃げようともがいていたが、上擦った声で返答する程度には思考能力が残ったようだ。
「そうだよ……！　生きててもつまらないし、周りは何もしてくれない。ムシャクシャしてたから誰でもいいから殺そうと思ったんだ！」
この手の事件が起きた時、ニュースキャスターが読み上げるような定型文。テレビやネットで見た時は怒りすら感じた言葉が、今は呆れるくらい哀れに聞こえる。
少なくともオレが押さえ込んでいる間は被害が広がる事は無い。どうせならと、常々思っていたことを男に聞いてみる事にした。
『世の中がイヤんなったっつーならよ、てめェ一人で死ねよ。他人を殺そうってェ考えが理解できねェ』
確かに世の中が嫌になる事はある。オレにだって今までそういう事はあったし、ある意味今がその絶頂だろう。しかしあくまで人生の判断は自分だけのものであり、そこに人を巻き込んで良い道理は無い。
「イヤだ、俺は死にたくない……俺がなんで死ななきゃいけないんだ！」
『はァ？』
「俺は悪くない、俺は悪くない！」
男は無様に足掻き、叫ぶ。……この手のバカは脳みそ膿んでんじゃねェのか？　世の中がイヤんなろうがてめェが悪くなかろうが、そこから人を刺そうなんてェ思考に飛ぶのは狂ってるとしか思えねェ。
『じゃあてめェのウサ晴らしに殺された奴はどうなンだ』
「知るかよ！　知りもしない他人が死んでも俺には関係ない！」

じゃあ知ってる奴なら殺さねェって事か。他人なら殺せるって事は、そいつの人格を知らないからか。認めていないからか。それなら……人として見ずに殺せてしまうからか。

『うぜェわ、てめェ』

オレは、男の手を刃物ごと一気に握りつぶした。刃物が砕ける音と骨の砕ける音が重なって響く。ボタボタと赤い滴が道路に零れた。

「いぎゃああひいいいいい！」

悲鳴を上げてのた打ち回る男の手を離してやる。先程まで刃物を握っていた男の手は元の半分ほど大きさまで圧壊され、砕けた刃物が突き立って奇妙なオブジェのようになっていた。

「ちくしょおォォ……なんで俺がぁ……！」

男は蹲って呪詛の言葉を吐き出す。……今てめェが味わってる痛みを他人にやってたクセして何を言ってやがるのか。どうせこれ以上聞いてても悲鳴か恨み言しか聞けないだろう。面倒くさいのでさっさと黙らせてしまおう。

『うるせェよ』

のた打ち回る男の腕を掴み上げ、そのまま振り回して街路樹に叩きつける。上手く背中から叩きつけてやったし、まァ死にゃあしないだろう。背骨がイッたかもしれねェが死ななかった分だけマシな筈だ。

「か……は」

男は背中を強く打ち付けたせいか上手く息が出来てないようだ。だが、オレの興味は既に男には無い。男の足元に倒れていた女性に歩み寄ると、傷の具合を確認した。

どうやら意識が飛んでいるようで、オレの姿は既に見えていない。まァ、意識があったらあったでビビられちまうんで面倒が無くて良い。

『……失血で気を失った……とかじゃねェな。傷自体は思ったよか浅い。とりあえず血ィ止めときゃあいいだろ』

悪いとは思ったが、女性の着ていた服を一部破いて傷口を縛る。

なんとか力加減を調整して傷口を塞いだ。まったく、今のオレの力だと締め付けすぎて傷どころか腕全体の血を止めてしまいかねない。
『まあ後は警察か救急車に任せりゃあイイか』
オレは立ち上がって周囲を見回す。そこには遠巻きにこちらを伺う多くの人々が見えた。男を始末した一部始終がバッチリ見られていたのだろう、その目は化け物を見る目そのものだ。
『……こりゃあキツいわ』
つまり化け物として開き直って生きて行くって事は、こんな目で見られることに耐えろという事だ。残念ながらオレはそんなに図太い神経は持ってない。人として生きる事は叶わず、化け物として生きるも苦痛。
「なあ、なにマンだ？」
『……は？』
こりゃあ死ぬしかねェか、なんて考えていたオレに酷く場違いな言葉が掛けられた。何事かと思って音源を探るが、何も探る程でもない。声の主はオレの足元にいた。
声の主はまだちっこいガキだった。親は近くにいない。いや、いるかもしれないがオレにビビって近寄って来れないだけかもしれん。ガキは興奮した顔でオレを見上げている。
『オレの事か』
「そう！　なあ、何マン？」
なにマンってェのはその前にウルトラだスーパーだと付くような代物だろうか。
『……こんな怪獣みたいな何とかマンがいるのか？』
「えー……じゃあ何のカイジュウ？　火？　しっぽが生えてるからドラゴン？」
『つーか怖くねェんかお前は』
「え？　怖そうだけどいいもののカイジュウだろ？　テレビでみたことあるよ！　でっかくて空飛ぶカメとか」
確かにそういう怪獣も見たことはある。そしてその手の怪獣は得

てして子供の味方だったりするのが常だ。そう考えれば、なるほどオレが正義の怪獣であってもいいんだろう。しかし、だがしかしだ。
『オレが何でいいもんだよ。そこの馬鹿を見れば正義の味方にゃあ見えねェだろが』
顎で指し示した先には、息も絶え絶えになって地面に転がっている男が一人。手首から先を完全に握り潰され、砕けた刃物が刺さった手は目を背けたくなるほど無残な有様だ。
まだ自分が化け物じゃなかった頃のオレだったとしよう。人からこの光景を又聞きしたり、ネットや新聞で見たなら「ザマぁみろ」と思えるかもしれないが、直接見たとなると男に幾らかの同情すら禁じ得ない。血と悲鳴ってのはそこまでリアルで痛々しいもんだ。
「でも、アイツはワルイ奴だから」
『……あ？』
ガキの口から、明確過ぎる、単純すぎる答えが返ってきた。しかし、何故かそれを笑い飛ばせずオレはその場に屈みこむ。それでもオレの方がでけェのでガキを見下ろす格好になるんだが、さっきより話しやすくはなった。
『おうガキ、確かにソイツはナイフを振り回して人を刺す悪者だ。でもそいつだって人間だぜ？オレがやった事は酷かァねえのか？』
「でも、アイツはワルイ奴だ！　ワルイ事したらやっつけられるんだぜ！」
ガキは片手を腰だめに構えたり、もう片方の手で空を切ったりとせわしなく動いている。詳しくは無いがある程度は解る。日曜の朝にやってそうなヒーロー物の変身ポーズを真似ているんだろう。ガキは、俺の前にビシっと拳を突き出した。
「おとうさんがね、いつもビール飲みながらいってる。『このくには、ワルイやつばっかりたすかるんだ』って」
そりゃガキの親父がそう言うのも無理は無い。母子を犯して殺すようなクソの裁くのに何年も掛けるわ、精神鑑定次第じゃ責任能力云々で減刑される。

未成年のガキどもは少年法を盾に暴れに暴れ、結果他人の命を奪ったところで名前も顔も伏せられたまま世間にその正体を知られる事は無い。てめェさえ良ければそれでイイなんて考えが蔓延し、結果として他人を傷つける事に恐怖を感じられない馬鹿が大量生産された。目の前で転がってる馬鹿のようにだ。

『……助かっちゃあならねェ悪者をブッ飛ばす。それが当たり前ってか？』

「うん！」

いや正直、最近のガキはもっとマセてるモンかと思ってたんだがな。テレビのヒーローなんて全部嘘っぱちの作り物だと解っているようなイメージがあった。まだこういうガキも居るんだなあと感心する。

『なあ、ガキんちょ』

「なに？」

『ヒーローってなァ、どんなんだ？』

「ワルイ奴をブッ飛ばして、困ってる人を助ける人！」

『ヒーロー、好きか？』

「うん！　かっこいいんだぜ！　何でもできるんだ！」

『オレは、化け物なんだぜ？』

「でも、ワルイ奴をブッ飛ばしてみんなをたすけてくれたじゃん！」

ガキは、真っ直ぐな目でオレを見ていた。誰も彼もビビって近寄ってこない中で、大の大人が泣き叫んで転がっている中で、その恐怖の根源であるオレを。

心の中にジワリと広がる何かを感じる。いや、感じるも何もそれはずっと心の中で燻っていたのかもしれない。

ああ、そうだろうよクソったれ。本当はやりたかったんだろう？

何だってオレはこの考えを最初に除外した。どうせ化け物として生きるなら、思う存分この力を奮ってみたいと……一度でも！　僅か

でも！　オレは思い付いていたじゃないか。
『ク……ククク……クハハハハハハハッ！』
解っている。それは酷く歪で、傲慢な考えだ。相手が悪だから遠慮なくこの力を使うなんて、エゴの塊で、人間を見下した化け物の考え。オレはそれに蓋をした。いくら悪人でも、この化け物の力で一方的に処断していいはずが無いと。
『くだらねえ』
まったく下らない。それはオレが疎んだものと一緒じゃないか。
人権を盾に加害者を守るこの国と。
我が身可愛さに弱者を見捨てる傍観者と。
裁く力を持つにも関らず、善を謳って悪すら守ろうとする愚者と。
いいだろう、ならばオレは無法と暴威を以って悪を滅ぼす者になろう。最早人ならぬこの身を、悪を裁く剣にしよう。
遠くサイレンの音が響いている。どうやら立ち去る頃合らしい。まあ警察も救急車も充分間に合うだろう。踵を返し、悲鳴を割って俺は歩き出す。その時、背中からあのガキの声がした。
「なあ、おまえ何！？」
何、とは随分な言い方だ。残念ながら何マンでもなければ何怪獣でもない。……が、そうだな。名前は必要かもしれない。北条崇では無く、神威という兵器としてでもない名前が。
とは言えパっと小洒落た名前が浮かぶ程の知識がある訳じゃない。サイレンの音も近づいてくる中、さてどうしたものかと考えていた。ふと視線を巡らせると、電灯の消えた大きな窓に映る自分の姿が見えた。相変わらずの化け物姿と派手に燃え盛る青白い炎。
『……炎。炎か』
何とかネーミングの指針となるものを見つけ、本やＴＶで見た知識を総動員させる。ややあって、《炎》と《悪をブッ飛ばす》というキーワードから納得の行くものを思い付いた。ガキんちょに振り返り、その名を告げる。
『オレの名は……浄化の炎（メギド）だ』

石畳を蹴って、オレは一気に跳躍する。ガキんちょがどういう反応を示したかは解らないが、この身にメギドの名を冠した時、オレは抱えていた心の重さがかなり軽くなるのを感じていた。
ビルの屋上を蹴り、壁面を蹴り、一気に駆ける。さて、ヒーローに至る第一歩を踏み出そう。オレにとって倒すべき最初の巨悪がいた事を思い出す。

脳裏には、あのムカつく狐ヅラが浮かんでいた。

◆◆◆

「何をしているんだ君は！」
部屋に戻った僕は、まず和に怒られた。……まあ、当たり前だと思う。数日間心配し通しだった相手の僕が、目が覚めれば忽然と居なくなっていたとあれば気が気で無かっただろう。挙句、漸く帰ってきたと思ったら全裸だったので色んな意味で驚かせてしまった。
「……いや、その。ほんとにごめん」
実際、部屋の近くまでは簡単に戻れた。しかし神威状態のままではドアをくぐれず、変身する時に服は破けたので変身解除すれば全裸なのは自明の理だ。結局人通りが完全に無くなる瞬間を見計らって変身を解除し、寒空の下を何とか部屋まで戻った次第である。
和には色々聞きたい事があったのだが、テンションが上がったままだった僕は帰ってくるなり裸で和に詰め寄ってしまった。頬を紅く染めた和に「いいから先ずは服を着ろ」と睨み付けられたのがほんの数分前だ。
「こほん……で、確か君が聞きたい事とは何だ？」
小さく咳払いをして和は僕を見た。彼女は少し不思議そうにこちらを見ている。それもそうだろう。ほぼ三日間蹲ったままで自殺にすら追い込まれていた人間がこうまで元通り……いや、元以上になっていれば。

「ああ、和が言っていた『指揮個体とのリンク』ってのを詳しく聞きたい」
「……確かにそういう事も言ったが」
彼女に対して「僕も不老不死の体なのか」と聞いた時に和はそれを否定した。そして指揮個体とのリンクが無い限りは能力制限され、外部からの破壊も容易であると。ならば逆の話はとても簡単で、指揮個体とのリンクを結べれば今以上の力を有するという事になる。
「いいか？　君が今使える力は強力ではあるが待機形（スタンバイ）態だ。基本的にエネルギーの消費を抑えて行動する為の状態だな」
「……人間の姿が待機状態なのかと思った」
「その状態は休眠（スリープ）状態だ。エネルギーの回復や生成時は完全に変身を解除する」
和曰く、神威は「兵器」であると同時に「兵士」であるという。つまり指揮個体という上官による戦闘命令が無い限りは本来の力が発揮出来ないようになっているという事だ。
「まあ、人類を素体にした理由は他にもあるが……とりあえず柔軟な思考の為にはあまり自我は抑制出来ない。しかし自我があると勝手な真似をする可能性は無いと言い切れん。その為に指揮個体からの許可制が使われた訳だ」
自律兵器という言葉から感情の無い戦闘機械を想像していたが、実際のところは戦場で臨機応変に武装を変更する柔軟な思想は人間が一番優れていたらしい。まあ、そうでなければ人間を素体にする理由も無い。全部機械でも良いだろう。
「それは僕と……和の神威にも出来る事かな」
和の眉根が寄る。恐らく僕が何を意図しているか察したのかもしれない。まあ、そうだろう。現状でそこまでの戦闘力を要する相手などアイツしかいないのだから。
「……恐らくは可能だ。指揮個体は専用で作られるケースが多いが、指揮個体破損時などの緊急措置として神威同士で指揮個体を再認定し、リンクを張れる」

「それは神威同士である以外の条件がある？」
「無いな。神威同士ならばどちらでも指揮個体になれる」
尤も私は正規の調整を受けた身ではないので戦闘要員にはなれないが、と和は締めくくった。どうやら僕は和を指揮個体とする事で今より高い戦闘力を得る事が出来るようだ。
「……崇。恐らく君は九尾の狐との戦闘を想定してそれを聞いているのだと思う。しかし何故だ？　君が戦う必要は無いだろう。少なくとも私が次元断層を教えなければ奴の野望は叶うことは無いんだぞ？」
「でも、アイツを倒さないと和は和の旅を続けられない。それにアイツ一匹が居るだけでもこの世界には充分な脅威だと思う」
そこに続けるように、僕は僕自身が得た答えを和に告げた。人に在らざる存在として、裁かれない悪を単身で裁く者になろうという意思を。その答えに最初は呆けていたような和は、やがてその端正な顔を歪めて渋い顔をした。
「正直、その道に進む事を良しと認める事は難しい。君はいずれ罪の意識に押し潰される。如何に人を超えた力を持つ者であっても君が人として生きた時間は長く、そこで培った常識や良識が君を苛むだろう」
「……うん」
「それに……多くの人は君を理解しない。君がどれほどの悪を裁き、人を救っても……人々は君を恐れ、世間は君の行為を《行き過ぎた正義》といい、また《悪》と責めるかもしれない。君はそれでもその道を選ぶというのか？」
「それでも……それでも僕はそうするよ」
和の問いかけに、僕はそう答えた。僕だってそれを考えなかったわけじゃない。いや、もう刃物を振り回す馬鹿な男を一人裁いただけでもそれを充分に痛感した。遠回りに僕を見つめる目。この世界にいてはならない「異物」を見る視線を刺すように感じた。
「和の言う通りだよ……今はこんな事を言っていても、僕はいつか

後悔するかもしれない。やっぱり止めておけば良かったって……化け物になった時に死んでおけば良かったって、後悔するのかもしれない」
「なら、どうして……！」
和の声は「訳が解らない」という僅かな苛立ちを含んで聞こえた。だから僕は、笑って答えた。精一杯の意地を張る為に、敢えて笑顔で答えようと……そう思った。
「僕は、この世界に僕自身を刻む。北条崇としてじゃなく、化け物として覚えられるとしても。このまま、何も残せずに……誰にも知られずに死んでいくくらいなら！　僕は世界に怖がられても、認めて貰えなくても、誰かを助けて生きていく！」
そんな僕の口上を黙って聞いていた和だったが、暫くすると呆れたように溜息をこぼした。
「……一つ聞くが、指揮個体の件が無理だったらどうする気だったんだ？」
「このまま狐と戦ってた」
僕の答えに、見た目にも解りやすく和の肩が落ちたが、和に何事か言われる前に言葉を続ける。実のところ、まだ言いたい事はあるのだから。
「それに……僕は和を守りたい」
「な……ッ！」
突如自分に向けられた言葉に、その内容に、和は驚くほどに狼狽していた。僕の言った言葉が徐々に理解出来たのか、次第に頬が紅く染まっていくのが見えた。困った事に僕の頬が釣られて熱くなっていくのが解る。
「き……君は何を言っているんだ？　君の今後の在り方に何故いきなり私が含まれる！？」
「い、いきなりって訳じゃない。その……会ってそんなに日は経ってないけど色々あったし、その……僕の人生でかなり特別な感じがするっていうか」

「それは吊り橋効果に似た錯覚に過ぎん！　非日常に叩き込まれた君が、たまさか頼れる相手が私だけだったに過ぎなくてだな……！」
「だとしても！　今、和を守りたい気持ちは本物だっ！」
吼えるように言った言葉に、和が「む」と呻いて押し黙る。しかし、和が何と言おうとこればかりは理屈じゃない。神威同士として惹かれあっているのでも構わない。
「あの狐野郎に限った事じゃない、これから先にちょっかい掛けてくる奴らの相手だって出来る！　和が力を使うと人格崩壊のリスクがあるんだろう！？　でも僕なら戦える！」
「う……確かにそうだが……しかし、しかしだな……何故、君はそこまで……」
何故か。……何故と問われて用意出来る答えなんて多くない。
友達がいない寂しがり屋が、たまたま優しくされたから気になった？
吊り橋効果で特別な好意を持ってると勘違いしている？
神威同士が反応してるだけで、僕の意思じゃない？
そのどれでも構わないし、どうでもいい。僕が今大事にしたいのはそんな理屈じゃない。
ああ、ご都合主義も大いに結構。「一目惚れ」が嘘だなんて言う奴はそれを理屈で全部説明してくれ。
――僕はそれでも胸を張ろう。
「和の事を好きになったからだ」
「……馬鹿者」
ついに反論の気力も無くしたか、和は俯いたまま黙り込んでしま

った。正直気まずいが、僕も何も言えない。僕の一方的な気持ちでも良いとか、そんな取り繕った言葉を言いたくなる。ところが、僕が耐えかねて言葉を発する前に、和の諦めたような言葉が聞こえた。
「解った……私の負けだ」
「え、と。それじゃ」
「待て。勘違いしてくれるなよ？　あくまで指揮個体のリンクを張って君を強化する事に賛同しただけだ。……いや、その、君の気持ちがどうでもいいという事では無くてだな。あくまで今は九尾の狐を如何にするかという事実が重要なのであって……」
　こちらに目も合わせずに和は途中からごにょごにょと言葉を濁していた。いや、僕も気持ちに嘘は無い。でも今は「何故」と問われたから答えただけであり、告白の返答を求めている訳ではない。
「う、うん。解ってる……先ずはあの狐を何とかしないとな」
　そう、何に於いても先ずはあの狐野郎を何とかしなければならない。和が彼女自身の旅を再開する為にも、僕が選んだこの先の生を歩む為にも、奴を何とかしない限りは進む事が出来ないのだ。
「よし、じゃあ指揮個体のリンク作業に入ろう。僕は何をすればいい？」
　場の空気を変えようと、表情を引き締める。和は空気を読んだのだろう、先程までの慌てた空気は一気に霧散していた。腕を組んだ彼女は、親指を唇に当てて黙考していた。
「……まず、リンクの条件は二点だ。《遺伝子認証》と《個体同調》のプロセスを行なう必要がある」
　和の言うところ、まず《遺伝子認証》によって指揮個体と戦闘個体間で認証を取る必要があるらしい。これは簡単な話で、銀行などの暗証番号や指紋認証を一緒だ。ようはリンク相手が誰であるか、またはそれが本物であるかを認証する為のものと考えていいだろう。
　次の《個体同調》は、戦略的な部分で重要なものらしい。というのも、指揮個体はその能力の殆どを戦場の情報収集、分析、戦略組み立て、指示に使う。指揮個体の戦術は戦闘個体との専用周波数に

より情報展開され、実行に移される。
「つまり指揮個体は頭脳であり、戦闘個体は手足。人間の体と同じでな、考えてから行動に移すまでにタイムラグが無いように情報伝達の同期連携を図る必要があるんだ」
実際、未来では指揮個体一体に対して複数体の戦闘個体をつける事でありとあらゆる戦況に対応したらしい。今は僕一人と言えども、和が僕の後方から戦況を確認して僕に伝えてくれるだけでも相当有利である事に変わりない。和が見える範囲なら、僕に死角は無くなるのだから。
「そうか……で、その方法は？」
「うん。まず《遺伝子認証》はそう難しい話では無い。文字通り、互いの遺伝子情報さえ得られれば良いんだ。髪でも爪でもいい、それさえあれば神威が情報をスキャニングして取り込んでくれるだろう」
和は身振り手振りを交えて僕に遺伝子認証の手段を教えてくれた。どうやらそれ自体は思ったより簡単だ。極端な話、僕が和の髪にでも触れて遺伝子情報のスキャンを望めば神威はそれを実行してくれる。
「しかし問題は《個体同調》だ。未来では支配者が専用のシステムや施設を使って強制的に個体同調を行なえたのだが……」
個体同調は指揮個体と戦闘個体の精神状態を一時的に完全同期させ、以降はその状態を記憶させる事でいつでも同期を図れるようにするものらしい。
指揮個体撃破時などの緊急事態も想定されているので、基本的に全ての神威は調整段階で特定の同期周波数を組み込まれているらしいのだが……。
「私たちは二人とも正規の調整を受けた神威では無い。従って個体同調が非常に困難であると言える」
「……その、個体同調ってのはどういう風にするんだ？」
「未来では、感情の幅をゼロにした状態に特定の周波を埋め込むよ

うだが……ごく簡単に言えば、同じ思考や感情を共有し、同調させるという手段になる。しかし『合わせよう』と考えるほど同期はズレがちだ」

……それは解る。例えば「集中しよう」と考えて集中すると。無駄な雑念が沸きがちだ。「集中しよう、って考えてるのが既に集中してないんじゃないのか？」とか「本当に集中している状態って何も考えてない状態じゃないのか？　じゃあこうやって思考を巡らせているのは集中出来てないんじゃないのか？」みたいな無駄な思考がドンドン沸いてくるのである。

「つまり頭が空っぽの状態なら神威が勝手に同期を組んでくれるのかな？」

「言うには易いが、そういう事だ」

さて、これは困った。残念ながら僕は瞑想して心を無にするなんて特技は持っていない。睡眠中とかなら無の境地に近いだろうか。いや、そもそも宿主が寝ている状態で神威は連携を取ろうとしてくれるのだろうか。

考えを巡らせようにも、僕はまだ神威の事を知らなさすぎる。どうしたものかと思案にくれる僕だったが、そこで和が重々しく口を開いた。

「方法が……無い訳ではないんだ。おそらく現状取り得る手段としては最上、未来でやっていたような完全な同期には及ばんかもしれんが……その、かなり高い精度で連携が取れるのではないかと思う」

「ほ……ほんとに！？　どうやって？」

その言葉に、僕は食いつくように彼女に詰め寄る。勢いに押されたのか、和は「うぅ」と呻くと俯いた。驚かせてしまっただろうかと少しバツが悪くなる。反射的にゴメンと言い掛けたが、僕の言葉を待たず和が喋りだした。

「まあ、そのだな。緊急事態であるし他に方法も無い……あ、いや……別に君に不満があるとかそういう事では無い。むしろ私としても君を好ましいと思う部分は多々あってだな……」

「……和？」
はて。彼女が何を言っているかサッパリ理解出来ない。こちらから目を逸らしたままブツブツと何事か呟き続けているが、その内容はいまいち要領を得なかった。
「いや……つまりだな？　君が私に好意を抱いてくれていると同様にだ、私としても己の危険を省みずに九尾の狐の傀儡から助けようとしてくれた君に少しばかり好意を抱いているというか何と言うか……」
「し……和？」
何か。何故か。彼女が言わんとする事がうっすら解ってきたようなそうでないような。しかし感覚でそれを理解しつつあるのか、僕は自分の鼓動が嘗て無いほど高鳴り、頬が熱くなってきてるのを感じた。
「つ……つまりだな、九尾のヤツめを倒す為に仕方なくという事では無く、私自身の意思で君とそういった行為に及ぶ事は吝かではないと……」
「あ……うん、ストップ。その、解った……解ったからさ」
二人して真っ赤になって俯く。……何をしてるんだろう僕らは。しかし彼女の考えは解った。お互いを想っている《好意》……いや、野暮はよそう。《恋愛感情》という感情の同期。そして、その行為による《快感》という感覚の同期。感情と感覚。意思や思考に囚われないシンプルな共有。
「……わ、私はその方法で構わない。崇、異論はあるか……？」
「よ……よろしくお願いします」
「なぜ畏まる！？」
和は焦ったように叫ぶが、仕方が無いじゃないか。幼い頃から孤立する事を選んだ自分に今までそういった機会はあるはずも無く、一人暮らしの生活を維持する為には無駄金は使えないのでそういった店にも行った事は無い。端的に言えば僕は童貞なのだから。
「……崇、恥ずかしいついでに言わせて貰うが……私にリードを期

待されても困るんだぞ？」
「そ、そうなの？」
「うぐ……その、四百年生きてはいるが君ほど心を許した相手は居なかったのだ。仕方無いだろう！」
……物凄いプレッシャーを感じる。童貞の身で、年上のお姉さんをリードせねばならないという事でしょうか。何かもう、固まって動けなくなるような重圧。
「……私は死なずの身だからな。やはり私自身、誰かに心を預ける事が怖かったのだろう。誰を想った所で……その人は先に死んでしまうのだ」
「和……」
和の口から不意に漏らされたその告白に、茹った頭が少し落ち着いた気がする。
「思えば……君を好きだと思えたのは、私と同じ時を歩める者という安心もあったのかもしれない。君ならば……心を預けても、いなくならないという安心が」
そうだ……僕は死なない。正しくは不死では無いにしろ、不老不朽のこの体は彼女の隣で生き続ける事が出来る。もしこのリンクが上手く行けば、僕の体は更なる戦闘力と共に滅多な事では行動不能に陥らない再生力まで手にする事が出来るのだ。
自分なら彼女の永劫の孤独を癒してあげられるのだと気付いた時、驚くほど肩の力が抜けた。確かに彼女は僕より人生経験が豊富で、僕より遥かに大人だ。だからと言って、あまりに特別視しすぎるのは良くないのかもしれない。
彼女が未来に求めているのは「普通」になる事だ。……なら、側にいる僕が彼女を普通の女の子として扱ってあげるべきじゃないだろうか。
「あー……その、上手く出来るかは解らないけど……和の事をちゃんと受け入れるよ」
「うん、君に出来る範囲でいい……私を受け止めてくれ」

どうにか絞り出した僕の言葉に、和は目を閉じる。……流石にそれが何を意味するか解らないほど僕も朴念仁では無い。和の唇に自分の唇を重ねて、目を閉じた。

「……ん」

ぴくりと震える和と、柔らかな唇の感触。もう正直、これだけで大分ヤバいというかいっぱいいっぱいなのですが。しかし男子に二言は無し。

「む……シャワーくらいは浴びるべきかもしれん。少し待っていてくれ」

そんな事を言って部屋から出て行く和を、既に死にそうな気分で見送っていた。正直、心臓の鼓動が痛いくらいだ。

僕は、この先の人生を和と生きていくだろう。でも……どれだけの時を重ねても、どれほどの苦難に日々を迎えたとしても、恐らく僕はこの気持ちを忘れないだろう。

僕の記憶からこの日が無くなる事は決してありえないと、そう思った。

この気持ちは僕の中にある正義を曲げないでくれると、そう信じた。

第五章【覚醒、咎討つ者】

第五章　【覚醒、咎討つ者】

夢を見た。
体験型の夢では無く、僕がもう一人の僕自身を見ている夢。見覚えのある制服は高校の時の物だろう、クラスじゃ用事ある時しか話さなかったような級友達と楽しそうに笑っている僕がそこにいた。
僕が浮かべた事の無い笑顔、僕自身が聴いたことの無い明るい笑い声。級友と笑いあう過去の僕の脇を、幼い子供たちが走り抜けて行った。それは、更に幼き日の僕であり、決別してしまった親友だった。
僕は、ただそれを見つめていた。
僕の前にいる僕たち。
失った僕の過去と、選ばなかった僕の過去。
人間じゃない生き方を選んだ僕が見た、それは後悔と未練の夢だったのだろうか？　……いや、恐らくそれは違う。その光景を眺める僕自身は、驚くほど穏やかなままだった。
『……さよなら』
これはきっと決別の夢だ。戻りたいと願う負の願望では無く、きっと人間として生きた最後の最後に僕自身が見せてくれた……叶えたかった夢。
彼らは僕に気付く事は無く、彼ら自身の生を謳歌している。……それでいい。僕は彼らでは無く、僕にしか選べない、僕だけの道を行くのだから。彼らに背を向けると、そこには一人の少女が立っていた。
『……行こうか』
僕は少女に向かって歩き出す。親友もいない、級友もいない僕だ

けど。僕の未来には、彼女が隣にいるのだから。

意識が覚醒した。寝起きの薄ぼんやりした感覚では無く、まるで眠らずに起き続けていたようなハッキリした感覚。見える世界は見慣れた自分の部屋なのに、捉えている感覚はまるで違うような違和感。

「……すごいな、これ」

古いブラウン管テレビから最新の液晶モニタに切り替えた、という表現は微妙だろうか。しかし目に見える風景は以前よりも明確に、正確に見えているように思える。以前から視力に自信はあったが、最早目が良いとかそういったレベルでは無い。

「……あれか、マサイの戦士とかはこんな感覚なのか？」

昔テレビで見ただけの知識だが、ケニアだったかタンザニアだったかに住んでいるというマサイ族の人は日本人に比べて視力がとんでもなく高いのだとか。恐らく兵器である僕はそのマサイ族すら凌駕する視力を持っているのだろうけど。

「……それがリンクの力だ。君は指揮個体とのリンクにより、君は完全に兵器として覚醒した事になる」

隣から和の声がする。首を巡らせると、そこには居間の座布団の上に座ってこちらを見ている彼女がいた。

「じゃあ、リンクは成功したって事か」

「うん。そ、そうだな」

リンクの成功を口にした時、和の頬が一気に赤く染まった。なんだろうとは思ったが、リンクを図った手段を思い出せば仕方の無い事かもしれない。布団に寝転がったままじゃ悪いかと思って体を起こすと、既に服を着ていた和に反して僕は裸のままだった。

僕も何か気恥ずかしくなって体を隠すように布団を被った。でも和の反応を見て、僕の中でもハッキリと形になった思いもある。リンクが無事に張れた事も大事だが、それ以上に大事に思える事だ。

「……これで僕は和を守れる力を得た。この力で僕たちは……一緒

に未来(あした)へ歩ける」
僕は知らず拳を握り締めた。不安がまったく無いかと言えば、そんな事は無い。普通の人間には歩み得ない永劫の時を行く事に、つい先日までただの人間として生きてきた僕が不安を覚えないはずは無い。
それでも、僕は一人じゃない。普通じゃなくなった今になって、僕はやっと一緒にいたい人と巡り合った。孤独ではないと感じることが出来た。今はただ、その思いを支えにして歩いていける。
「……崇、君の得た力は強大だ。しかし奴もまた大妖として名を残した異世界の生物だぞ？　勝算はあるのか？」
「それは……解らない。でも神威の力が本当に僕の思い通りになる物なら、勝算はゼロじゃない」
確かに僕は戦いのノウハウなんて持ってない。力に目覚めた時は狐が勝手に警戒して逃げ出してくれたが、あの時戦っていれば知識と経験の不足をあっさり見抜かれて負けていた可能性もある。しかし、神威という存在を理解していれば次は真っ当に戦えるはずだ。
「……解った、君を信じよう」
「ああ、任せてくれ」
最初の戦闘から既に四日目を迎えている。僕というイレギュラーを含めても、恐らく狐は動き出してくるだろう。いや、僕と言う存在を排さなければ和を手にする事は出来ないのだから間違いなく僕との交戦を含めた手を打ってくる。
「よし……じゃ、化け狐を倒して旅の始まりを飾ろうか」
「ふふ、随分余裕の言い回しじゃないか？」
気を抜くなとか、真面目にやれと叱られる事を予想していたけれど、予想外にも和は柔らかく微笑んでいる。それがプレッシャーを跳ね返す為の虚勢なのか、僕への信頼なのかは解らないけれど、後者だと信じて僕も微笑む。
「行こう」
未来を始めるために、僕は今までの全てに決別する。

◆
◆
◆

僕が人として終りを告げた最初の場所。僕が化け物として産声を上げた最初の場所。あの廃工場跡に二人でやってきた。

ゆっくりと街を歩き、それなりに心にあった思い出を一つ一つ確かめて。和と二人で缶コーヒーを傾けて、今から始まるであろう戦いすら日常の一コマであるような気軽さを装って。正面玄関を脇に抜け、あの時と同じように外周の隙間から中庭へ。

そこには砕け散った瓦礫の巨人の残骸と、地面に残った和の血痕。それを見て僕は眉を顰めた。もう、あんなモノを地面に残したりはしない。

「和、ここで良いのか？」

「……ああ、次元断層はここで開く。前はそれを確かめに来た時にヤツが現れた」

時間は夕焼けの光が闇に呑まれ始める時間。少し洒落た言い回しをするならば逢魔ヶ時。化け物同士の饗宴を始めるには良い頃合だろう。

「そっか……じゃあここで終わらせた方がスッキリくるかな？　……九尾の狐」

僕はその場で声を張り上げる。廃墟に僕の声が残響し、一瞬の静寂が訪れた。何の気配も無かった空間に、突如濃密な存在感が滲み出してくる。

【んンー？　バレてたんだぁ……流石だねェ。いやいや、当然かなァ？】

建物の影から這い出るように、黒い影が形を成す。耳障りな声と共に現れたのは、間違いなくあの狐ヅラだった。

「そりゃあね。一日中尾けてただろ」

【ふゥゥん？　そんな事も解るんだ。キミもすっかり化け物って事だねェ？】

狐がいやらしく口の端を吊り上げる。化け物になった覚悟をしたつもりではあったけど、コイツに言われるとやっぱり不愉快だった。
「……そういうお前も何日か大人しくしてたって事は小賢しいネタでも仕込んでたんだろ？　態度のワリには小さいね」
僕の言葉に狐は目を細め、明らかに気を害しているように見えたがすぐに元の調子を取り戻す。クックックと喉を鳴らして僕らを嘲笑うように肩を竦めた。
【いーやァ？　小賢しいなんて心外だなあ……君たちがちゃあァァんと言う事を聞いてくれるように、精一杯のおもてなしを用意させてもらったよ？】
そういった狐がパチンと指を鳴らす。それを合図に、狐が現れたときのような存在感が幾つも場に現れた。
「……やっぱり小賢しいじゃないか」
落ちかけた夕日の残照に浮かび上がるものは幾つもの異形。多分どれも何かしらの名で妖怪として伝えられた異世界人だろう。角を持つ者、爪牙を持つ者、人に近い形を持つ者もいれば、生き物に見えない者まで幅広い。その数、見えるだけなら十数体という所か。
【みィィィんな私のお友達なんだよ。君が多少強かろうがこれだけ相手にするのは難しいんじゃないかなあ？　だからさ、諦めてその子を渡してよ？　ね？】
奴が和を指差してケラケラと笑っている。……冗談じゃない、ケラケラ笑いたいのはこっちの方だ。古今東西、悪者が人数をひけらかして上手くいった試しなんて無いのだから。呆れたように和が肩を竦め、狐に問う。
「……一つ聞いておこう。ここにいる奴らの狙いは同じか？」
その問いに、狐がさも愉快そうに笑う。
【だから言ったじゃないさァ？　みィんな次元断層の場所を知りたい私の同士さ。目的は各々違うかもしれないけどねェ】
狐のように人を蹂躙する者か、土蜘蛛のように望郷する者か、まったく違う目的を持つ者か。それをいちいち判別する事は難しいが、

それでも僕が言う事は一つだ。
「……先に言っておく。アンタらがどんな望みを持っていようが狐に味方して襲って来るって言うなら等しく敵だ。少なくとも話し合いで何とかしようって考えてくれる奴は退いてほしい」
僕と和にしても、あの土蜘蛛のような存在であるならば戦いたくは無い。そう思っての提言だった。しかし、彼らは僕の言葉に答える事は無く、威圧的な気配を放ち続けている。
「交渉決裂か」
「……そうらしいよ」
交渉の余地が消えたなら、やる事は一つしか残されていない。僕らを嘲り笑う狐に向けて一歩。居並ぶ敵に相対するように、和を背に守るように立つ。
「躯体変換（リアクト）」
短く唱えた言葉に反応し、僕の体が硬度を帯び始める。本来は言葉にしなくても神威に転じる事は可能だ。しかし、この言葉は重要な儀式だ。《神威》という兵器ではない、《メギド》というヒーローである為に。
パキパキと音を立てて、僕は鋼の魔神に変貌する。
炎の鬣を揺らし、オレは和の為の剣に成る。
僅かな時を於いて黒銀の巨躯へと転じたオレは、そのまま狐野郎を睨み据える。何も手出しせずに俺の変身を見ていたのは、こちらの戦力を見縊ってやがるのか。オレたちを舐めた態度にムカつくが、戦力を整えさせてくれるってんなら是非もない。せいぜい後で泣きを見てもらうとするさ。
『和』
「ああ、アクティブモードへの移行を許可する」
和が俺の呼びかけに応えた瞬間、全身に力が満ちるのが解った。体中の何かが開いたような、表現し難い感覚。力が外へと伸び、別の力と繋がる事を求めているような感触。そう、ここからが俺たちの新しい力。

『回線接続（コネクト）ッ！』
叫んだ瞬間、オレ自身が一気に膨張したような感覚に襲われる。体中に駆け巡る感覚は間違いなく快感であり、この接続だけでイっちまいそうな程だ。確か個体同調はファーストリンク時の感覚を記憶し、その状態を再現する事で以降の同期連携を行なうというものだったハズだ。……なるほど、そりゃあ快感だ。
「く……は、あぅ……！」
オレの背から艶めいた和の声が聞こえる。……ああ、うん。状態を再現してリンクを張るって事は影響を受けるのはオレだけじゃねェわな。
『大丈夫か？』
「ば……馬鹿！　こっちを見るな！」
心配しての事だったんだが怒られた。とは言え敵を目の前にして気を抜くワケにも行かねェ。ここは素直に背中を向けておくとする。
「ふぅ……ぅぅ、同期、完了」
俺の見ている世界と和が見ている世界。雁首並べていやがる敵の位置、体格、総数。ありとあらゆる情報が頭の中に流れ込んでくる。だが情報は膨大でありながらも混在する事は無く、一瞬で整然と理解する事が出来た。オレと和、お互いの神威の全力状態がコレってわけか。
『それじゃあ……こっからがオレの本番だぜ！』
――背面装甲に端末射出口形成。
――無線端末形成。
頭の中で必要な兵装を編み上げる。オレの思考を受けた神威は瞬く間にその意に答え、この身体に武装を出現させた。背面部を展開させ、そこから体内で構成した小型の端末（ビット）を射出する。大人の拳程の大きさのそれは、上空に飛ぶと一気に四方へ展開した。
【何を企んでるんだよオマエ……】
『ビビんなって……すぐに解るから待ってろよ』
空中で散開したビットを一瞥して訝しげに目を細める狐を挑発す

るように笑う。化け物どもはオレの行動に警戒し始めたようだが、もう遅い。既に夕日は沈み、夜闇に包まれていた空が再び眩く照らされる。

【なにィ……！？】

上空と四方を覆う光の壁。広大な廃工場の中庭を切り取った光の箱は、やがて眩い光を徐々に収める。箱を形成する四角の頂点にはオレが射ち出したビットが浮かんでいた。

【ちィィィ……閉じ込められたって事かよォオ！】

『半分正解、半分外れだッ！　電磁加速（リニアブースト）！』

叫びながら、オレは脚に意識を向ける。その瞬間、バチンと派手に火花を散らしてこの巨体が疾駆した。風景が一瞬線のように歪み、正面にいた化け物一体を粉々に吹き飛ばして。

【なァ……！？】

狐野郎が二度目の驚愕を見せた時、オレは一瞬で化け物の群れの真ん中に飛び込んでいた。光の檻は敵を逃がさない為のもの……そして強力な電磁力で編み上げられたこの結界はオレの力を遺憾無く発揮出来る舞台でもある。

「崇、近接対応距離に標的五体。方位二、四、五、七、十」

加速を制動したオレに、和が叫ぶ。彼女が得た情報は互いの神威を介してオレに供給される。彼女の見ている視界がオレの脳に焼き付けられて、位置情報を一瞬で把握した。

『おおおおああァァァァ！』

指示のあった位置を見ずに爪を振るう。いちいち目で確認する間でも無く、オレの手に伝わった鈍い感触が命中を教えてくれた。或いは鳴き声、或いは言葉を発して断末魔が響く。

「敵五体沈黙。残存勢力は九尾の狐を含め九体……来るぞ」

オレたちの力を見縊った結果、一気に五体の戦力を潰された。不意打ちである事を含めてもそれは驚異的であるはずだ。様子見は危険と判断したのか、敵勢力の一斉攻撃がやってくる。

手にした得物を叩き付けてくる者。無数の光弾を撃ち出して来る

者。ありとあらゆる攻撃が折り重なる軌道を描いてオレに襲い掛かる。だがしかし。
『当たらねェよ！』
【何だとォ！？】
全攻撃の僅かなタイムラグを縫って回避する。それは紙一重に、大きく距離を取り、必要とされる動作を駆使してあらゆる攻撃を捌く。重ねられた化け物共の攻撃は悉く空を切り、無様に姿勢を崩す。
「……まさかここまでとはな」
背後から、驚愕を含んで和の感嘆が聞こえた。つい先日までただの人間として暮らし、戦闘経験などあろう筈がないオレがここまでの戦闘力を誇るとは想像し得なかったのだろう。それは当然の反応だ。
例えば和がレーダーであり、神威という存在が銃であったとする。しかし実際に銃を撃つのはオレであり、レーダーが高性能だろうが銃が高威力だろうが使い手が扱いきれなければガラクタにしかならない。事実として北条崇というオレ自身は経験不足のヒヨっ子だ。
しかし、銃そのものが標的に照準を合わせてくれるとすればどうだ？
『予測ルート右上腕部、右大腿部。避けるぞ！』
それはオレの狙いか、それともオレの声に反応して体が勝手に動いたか。正しくはその両方だ。種を明かせば、オレは自身に融合している神威そのものに「俺の身体を動かす権利」を与えてやったのだ。
オレが得た情報から、神威が取るべき行動を判断して実行する。銃が勝手に狙いを定めてくれるならば、オレはトリガーを引くだけで良い。
オレが神威を従えて武器を得るように、神威もまた俺の肉体を従えて戦う力を得るというわけだ。一瞬前までオレが居た場所に、大木と見紛う太い腕が突き立つ。
【シマッタァァ！】

必要最小限の動きで化け物の一撃を避けた俺は、反撃まで一秒と掛からない。指先をまとめて貫手の型を作ると、化け物に向けて引き絞った腕を一気に突き立てた。
血飛沫の幕が派手に舞い上がる。その向こうで、狐野郎の顔が憎々しげに歪んでいるのが見えた。
「……崇、敵も警戒しだして近付かなくなる頃だ。可能なら一気に殲滅しよう」
『オーライ』
和の言うとおり、敵勢力は一気に距離を離して防御の構えだ。攻撃の隙を突かれるのにビビッてるんだろう、後の先で対応しようというのが見え見えだ。
しかし、甘い。最初に電磁加速で突っ込んで暴れた手前、オレの戦力が近接戦闘に特化したものと考えていればこその対応だろうが……神威はその場で必要な兵器を生成出来る代物なのだ。尤も、そんな事は奴等にゃ知る由も無し。武器を作り出す余裕を与えてくれた事に感謝しておいてやろう。
『さぁ、大掃除と行こうか』
――躯体外殻部に放電角を形成。
――射出端末及び結界外壁部に電極を設定。
――指揮個体保護用の遮断結界構成開始。
――結界内に通電性ガスの散布を実行。
オレの体が徐々に変化していく。肩や背を中心に巨大な角が突き出し、その表面を雷撃で覆い始める。今や手足は大地に根を張り、ピクリとも動かない。
【ナ……何ダ……！？】
やがて結界の外壁が煌々と光を帯び始め、その表面に雷光が走り出したところで漸く化け物共は明確な危険を察知した。自分たちは失敗したのだ、距離を取ることに意味など無かったのだと。
【しまったァ！お前ら、避けろォォ！】
狐野郎の怒号が響く。しかしもう遅い……そして何よりコレは、

避けるとかそういうレベルの武器じゃあねェ。
『プラズマケージディスチャージャーッ！』
雷が至近距離で炸裂する轟音が連続し、オレと結界の間を光の竜が駆け巡る。死の檻に満たされた雷撃は、逃げ場など残さず一切の空間を埋め尽くした。この戦場に着く前に考えたばかり、出来立てホヤホヤの新必殺技だ。
本人の知識がイコール武器になるってェんで、わざわざそれらしい本を事前に読み漁っておいたってワケだ。……まさか神威がここまで便利な兵器とは思わなかったが。

『どうだ……？』
荒れ狂う雷光が収まった時、廃工場の風景は一変していた。外壁は焦げ付いて黒煙をたなびかせ、ガラスは軒並み割れて吹き飛んでしまった。……地面のそこかしこには生物の形をした炭が転がっている。
『……やりすぎたか』
「かもな。あれ程のものなら市街地まで光と音が届いているかもしれん、早めに退散したい所だが……」
和の声は硬い。恐らく彼女は既に気付いているのだろう。オレの動体センサーにも一つ元気な反応が見える。
『そうも行かねェんだろうなあ……』
宙の一点を凝視し、オレは再び身構える。視線の先には自慢の尻尾を大きく広げて浮遊する九尾の狐がいた。正直、プラズマケージディスチャージャーで死んでいて欲しかったんだが、大妖怪様相手にゃあ期待しすぎたか。
【ああ……面倒臭いなァ。アイツらに任せて楽しようと思ってたのにさァァ】
『はん、オトモダチ相手に随分な言い草じゃねェかよ』
狐野郎はフンと鼻を鳴らす。……まあコイツが本気で友達云々言うとも思ってちゃいねェが。むしろ解りやすい悪党っぷりで遠慮な

くブチ殺せるってモンだ。
【まァいいよ、どうせ私一人でも充分だし……気晴らしにちょっと本気を出してやるよォ！】
狐の咆哮を共に大気が震える。肌を刺すような殺気は、ただの人間ならそれだけでショック死するかもしれない。九尾の狐が殺生石になって振りまいたってなァこれの事かね？
しかしだ。オレは狐が叫んだ言葉に身構えちまうどころかついつい笑いが込み上げてくる。もう表情なんぞ作れない鋼の貌すら笑いで歪んでしまいそうだ。
【……何が可笑しいんだよオマエ。恐怖で狂ったかァァ？】
その言葉が限界だった。何とか我慢して笑いを堪えていたんだが、ついに盛大に噴出して大笑いしてしまう。まったくコイツは勉強不足だ。オレは狐野郎を見上げて言ってやった。
『おい……てめェが今吐いた台詞はよ、世間じゃ「死亡フラグ」っつーんだぜ？』
【抜かせェェェ！】
奴は宙から動かずに大きく振りかぶった手を振り下ろす。何の真似かと思った瞬間、オレの肩口にガツンと鈍い衝撃が走った。
『こいつは……！』
あの時、和を攻撃していた不可視の一撃だ。オレの装甲ならこの程度では大したダメージにもならないが、遠距離からチクチクやられるのは気分が悪い。それに、嫌な予感がしている。仮にも大妖として名を残すコイツが、こんな手品程度の技で終わるだろうか？
『つっても手の内なんざ聞いても教えちゃくれねェわなあ！』
腕を砲身に変形させる。得体の知れない相手に突っ込んで行くのも馬鹿だが、防御を固めて待っている手もない。体組織から弾丸を生成すると、腕の砲身に電流を通して高速で射出した。即席の電磁投射砲（レールガン）だが威力は充分、立て続けに三発の弾丸が奴を襲う。
しかし超高速でブっ放した弾丸は、ガガガンっと派手な音を連続させて不可視の壁に防がれた。素直に命中してハイ終りとも思って

いなかったが、ここまで完全に防がれるのも予想外だ。
【ひひッ！　そんな玩具じゃ届かないよォ！】
『うるせェんだよ馬ァ鹿！』
獣ヅラを上機嫌に歪ませてケラケラと笑う姿が癇に障る。とりあえず効く、効かないは別にしても手を休めるのは得策じゃあ無い。空中に浮かんだままの狐に連続して弾丸を撃ち込む。しかし依然として弾丸が奴に命中する様子は無かった。
【じゃあ、そろそろ力の差って奴を教えてあげるよォ……】
弾丸の嵐を物ともせず、狐が一本指で天を指す。そこからレーザーの一発でも飛び出して来たっておかしくない。オレは警戒して防御姿勢を固めたが、その防御姿勢を見た事で狐の頬が更に吊り上ったように見えた。
【ヒヒッ！　馬ァァ鹿！】
嘲りの言葉と共に、天を指していた指が地に向けて振り下ろされる。レーザーだ飛び道具だが撃たれた気配は無い。何の真似かと訝った瞬間、オレの肩口から縦一文字に線が走る。
『なんだッ……！？』
そこに気付いた瞬間、浮かび上がった線をなぞるように肩がバッサリ切断された。並の武器じゃあ傷も付かないはずの強度を持つ体が。
『くぅぅあああぁぁぁぁっ！』
この体になってからは凡そ無縁であったろう「痛み」が肩から押し寄せてくる。幸いにも切断されたのは肥大化した装甲部分のみであり、腕ごと落とされなかったのは幸いと言えた。
切り落とされた肩を一瞥して舌打ちする。切断面は鏡のようにツルツルで、あの攻撃が恐ろしく鋭利なものであると容易に判別出来た。
「崇っ！　その攻撃は防ぐな、避けろ！　……空間歪曲を確認した。恐らく奴は物質では無く空間そのものを切断した。厄介な話だが、奴は空間操作能力者だ」
鋭く叫ぶ和の言葉に舌打ちする。要するに漫画でありがちな「空

間ごとぶった斬るから防御出来ない」ってチート技か。まがいなりにも大妖怪とは言え反則が過ぎる。
【クフェフェフェ！　ほォォうら、痛いだろォォォ？】
狐は空中で腹を抱えて笑っている。この隙に弾丸の一つや二つブチ込んでやりたいが、恐らくはまた不可視の壁に止められる。こんなモンが体のド真ん中に当てられたら、いくらオレでもヤバい。
『つまり遊ばれてるってワケかよ……！』
あの一撃で最初に致命傷を狙われていれば、恐らく既に勝負は付いていた。それをせずに肩を狙ったという事は、圧倒的な優位性を理解した上で嬲り殺そうという腹なんだろう。
『クソ狐が……それも死亡フラグだってェんだよッ！』
【イーィヒヒヒィ！　じゃあ何とかしてみなよォ！】
狐の指が縦横に空を凪ぐ。足を止めているのは拙い、狙いを付けられないように廃工場の中庭内を高速で跳躍する。先程までオレが立っていた場所に、カッターナイフで紙を切ったように鋭利な断面が生まれた。
『精々今のうちに調子に乗ってやがれってんだ』
攻撃を避け続けている間に気付いた事がある。幸いにも能力の発動から作用まで、ほんの少しだがタイムラグがあるようだ。一秒にも満たない時間ではあるが、それだけでも猶予があるならありがたい話だ。
普通の人間ならば逃げる間も無くこの世に別れを告げるハメになるが、オレの機動力があればギリギリ避けられる。体の中心辺りを狙われると、避けても端っこは持っていかれるが致命傷にはならない。
『オラ、余裕こいてる暇なんざ無くなるぞ？』
避けると同時に電磁投射砲を数発叩き込む。やはり弾丸は不可視の壁に阻まれたが、狐の顔が鬱陶しげに歪んだ。
【避けるくらしか出来ないくせに吼えるんじゃないよォォ！】
立て続けに放たれた斬撃を何とか避けきる。どうにも無駄にプライドが高いらしい。大見得切った相手にチョコマカと逃げられた挙

句に反撃が飛んでくるという事態が相当気に入らないようだ。
奴の力がどれ程の労力を必要とするか解らないが、持久戦になればこちらに分がある。精々逃げ回って体力を削り取ってやろう、そう考えて躯体機構をより移動に特化させようと変化させ始めた時だった。
【よォ、化け物ォォ……私は確か、両手足は潰しても良いって言ったよねェェ？】
狐の口がいやらしく吊り上り、オレとはあさっての方向に指を上げる。何いってやがると言おうとした瞬間、その言葉の思い出し、意味を理解した。反射的に向けた視線の先には彼女がいる。
『フザけろ、馬鹿がァッ！』
全身のブースターを駆動させて和の元へ飛ぶ。移動に特化した体に変形させていたのが幸いか、和の目の前に到着するまで数秒と掛からない。地面を踏み割って着地したオレは、そのまま和を抱えあげた。
『和ッ！』
「きゃっ……！」
短い悲鳴を上げる和の体を軽々と持ち上げる。しかしその瞬間、視界の端でオレの足に走る線を確認した。それは、和の足を狙ったであろう空間切断の跡。あのクソ狐、脅しでもハッタリでもなくマジで和の足を狙ったってェのか。
しかし飛んで避けるには既に遅く、仮に避けられたとしてもオレの加速に和が耐えられるとは思えない。要するに、オレは成す術も無く足をぶった斬られるしかなかった。
『がああぁぁぁ……ッ！』
「崇……？　崇っ！」
膝から下を完全に切断され、バランスを崩す。何とか体を捻って和を抱きとめると背中から地面にブチ落ちた。遅れて、オレの両足がゴトリと地面に倒れる。……斬られた足が超いてェのは勿論、地面に転がった自分の足を見るってのはかなり参る。

「崇……すまない、私が奴の目に付かない場所まで行っていれば良かったのに……！」
斬られた傷跡とオレの顔を見て、和が小さく叫んだ。見れば目尻に僅かながら涙が浮いている。……こりゃいけねぇ、和を泣かすのはどうにも気分が悪い。
『気にすんな、一緒に戦ってたんだから同じ場所にいた方がいい。見えねェ方が心配だぜ』
「……でも、でも私のせいで崇が死んじゃったら、やだよ……！」
……和は気付いてねェのか、素で喋ると可愛いのな。こりゃあ益々いけねえ、狐相手に死にそうになってる暇なんざ一秒だってありゃあしねェ。
しかし両足を落とされた今、奴に対抗し得る機動力を失った。今のオレが持つ再生力ならば、切断面同士を貼り合わせればあっさり繋がるだろうが、和を抱いたまま飛び回る訳にはいかない。どっちみち迂闊に動けはしない。
【イイ雰囲気の所悪いんだけどさァ……どうかな、そろそろ観念してよ？　なんなら君も私の手駒にしてやってもいいからさァ？】
『うるせぇハゲ』
狐の目元がピクピクと痙攣している。「殺さずにいてやる上に恩赦までやったのに」ってなもんか？　ザマぁみろ、精々気を害してくれ。和を片手で庇い、電磁投射砲を撃つ。効かないと解っちゃあいるが、獣風情の口上を大人しく聞いてやる気は無い。
【だからさァ、無駄だっつってんだろうがよォォォ！】
人を小馬鹿にした口調が消え、荒々しく叫んだ狐が再び指で空を切る。動けないオレに避ける術は無く、砲身に変えていた片腕が切り飛ばされた。激痛に叫びたくなるが、これ以上和の前で無様を見せたくも無い。
【鬱陶しいんだよォ！　お前たちの攻撃なんかさっきから一回も通じてないだろォがァ！　ええ？　お前がどれ程の兵器でも、私の作る壁に外から何をしても通じないんだから大人しく女を渡せよォォ

ォ！】

苛立たしげに、狂ったように、狐野郎は口の端から涎を振りまいて叫ぶ。その狂態にちょいと引いたが、今は気にする事じゃない。和を死なせない為に、打てる手を打たせてもらおう。

『……和』

「な、何？　崇……！」

『動くな』

「……え？」

オレは和を立たせると、残った片手を砲身に変形させる。作り出した銃は、弾丸を撃ち出す電磁投射砲では無く、膨大な電力をそのまま弾丸に変えて発射するプラズマキャノン。そして、その銃口は和に向けられていた。

【な……お前、何考えてる……ッ！？】

『……てめェも動くんじゃねェ。指一本、尾の一本でも動かしたら……どうなるか解るよな？』

余程の馬鹿じゃなければこのシチュエーションと言葉の意味は解る筈だ。俺が全てを言うまでも無く、狐は歯噛みしたまま身動きをとめた。砲身の中には、既に高圧のプラズマ弾が生成されている。

「た……崇……？」

自分に向けられた銃口と、その中で唸りをあげるプラズマに、和の声が震えている。彼女もまた、先程のオレの言葉を狐と同じように意味を理解していたようだ。どうして？とオレに目で問うているが……しかし、オレが彼女に意味を求めるのはこれから（・・・・）だ。

『初めて……初めて和の力を見た時、オレはすげェ驚いた。人間の力じゃ、あんな風にはならないって』

「崇……？」

和は、オレが何を言いたいか解らないといった風に困惑している。しかしオレはまだそれをズバリ切り出す訳にはいかない。条件は、まだ揃っていない。両足と片手を失ったオレは、バランスを崩して

よろめく。銃口を突きつけたまま、オレは地面に倒れこんだ。
『なぁ、和。もしもアイツが土蜘蛛みたいに死んだとして、魂は故郷に帰れるかな？』
オレの言葉をキョトンとしたまま聞いていた和が、気付いたように目を見開く。彼女の手が、弾丸を宿した砲身をそっと包み込む。
「ううん……きっと何処にも行けないね」
そう言って彼女が微笑んだ瞬間、彼女の黒髪は一瞬で変貌を遂げた。
和の髪が白く染まっていく。
まるで水の中に絵の具を落としたように。
夜明けの光が闇を駆逐するように。
頭の天辺から、毛の先まで一気に。
亜麻色の目は眩い金色に輝き、和から力が溢れ出してくる。オレが神威になったからなのか、和とリンクを結んだからなのかは解らないが、初めて出会ったときには見えなかったそれは光で編まれた翼のように見えた。
【お前らァァァ！　何をしてるんだよォォォ！】
ここに来てさすがに狐もオレが何か企んでいる事に気付いたようだ。指を振り上げ、空間を切り裂こうとする。
【ぬ……あァ……ッ！？】
だが指は振り下ろされない、振り下ろせない。もう一度オレの腕を斬り落として砲撃を防ごうとしたのだろうが、奴の斬撃の射線上にオレの砲身を庇うように和が立っている。バランスを崩して倒れこんだのは、この位置取りの為だ。
『チェックメイトだぜ、狐野郎』
オレが何を企んでいても、奴が和を狙う以上は手を止めざるを得ない。そしてここに来ても不可視の壁を過信し、反撃を防ぐ為に和ごとオレを斬らなかった事で奴は完全に詰んだ（・・・）。
和に目配せし、互いに頷きあう。オレは空中で固まったままの狐を見上げた。

『ああ、冥土の土産に一個教えておいてやるよ』
【！？】
腕の砲身からプラズマ弾が消滅する。初めから何も無かったように、忽然と。その賭けが上手く行ったかなんて心配する事は無い。オレが信じる和に、失敗なんてありはしないのだ。
『ここに次元断層が開くっつーのもウソだから。残念でした』
【ッ！　き……貴様らァァ、ガ！】
断末魔は最後まで続かない。狐野郎の体内に転送されたプラズマ弾はオレの制御を失って暴走を起こす。体の内側から内臓を焼かれ、喉を焼かれ、叫び声を上げる事も許されない。
【――――――――ッ！】
無音の絶叫を上げて、九尾の狐と呼ばれた生き物が焼滅する。派手に爆発した死体は火の尾を引いて中庭に散らばった。
『は……風情の無ェ花火だぜ……』
ゴトンと腕を地面に叩きつけて仰向けに倒れる。どうにも無様な格好で終わっちまったが、どうやら最悪の敵は始末出来たようだった。
「く……っ！」
『……和！？』
小さく漏れた苦悶の声に、オレは反射的に首を巡らせる。そこでは和が額を押さえて肩膝をついていた。それが記憶の流入であると気付き、オレは反射的に和を掴み寄せた。
『おい……和、しっかりしろ！　飲まれるんじゃねェ！』
力を使い出してからこの場にいたのはオレと狐野郎。最悪の場合、二人分の記憶に食われて和が壊れる可能性がある。……奴を倒す為に仕方なかったとは言え、こうならない為にオレが力を得たってぇのになんてザマだ……！
「……う、あ……崇。大丈夫、大丈夫だ……」
『そうなのか！？　無理してねェだろうな？』
「ああ……土蜘蛛の時と違って、使ったのは最後の瞬間移動だけだ。

奴の記憶が入り込んできたのは気分が悪いが……崇の分は、前に吸収してからの差分程度だ」
和の手がオレの手に添えられる。少し弱々しい手付きではあるが、意識はそれなりにしっかりしているらしい。
どうやらそれ以前のオレの記憶は上書き程度のもので大したダメージでは無いようだ。感覚的には二～三日程度の記憶量のようで、致命的なダメージではないと和は言う。
『……そうか』
どうやらオレは和を失わずに済んだらしい。安堵も手伝って再び地面に倒れこむ。支えも無いままに倒れこんだオレの図体は、重々しい地響きを立ててコンクリートにヒビを入れた。
『……和？』
和は膝をついていた場所にぺたりと座り込んでいる。その頬と耳は、何故か紅く染まっていた。……なんでだ。ここでそんな顔をされる理由はトンと見当たらない。不意に彼女と目が合ったのだが、その瞬間にものスゴイ勢いで顔を逸らされた。
『そーゆー反応をされる理由が解らんのだが』
「あ……いや、その……」
和は気まずそうにこちらに向き直る。依然頬は紅いままで、顔はこっちに向き直ったが目は逸らしっ放しだ。いや、さすがにちょっと傷付くと申しましょうか。ボスキャラを倒したご褒美的なものがあっても良いんじゃなかろうかとか。
そんな事をモヤモヤと考えていると、やがて意を決したように和は口を開く。それでも何度か「うー」とか「あー」とか言いよどみ、ようやくそれを口にした。
「……あ、あのね？　その、前に吸収した記憶から差分を吸収したって言う事は……あの晩の事も、解っちゃったって事で……」
『……あー』
地雷踏んだ。和の言うあの晩という事はあの晩であり、赤面して言うような事であればあの晩以外の何物でも無い訳で。

「崇が、えーと……どんな風に私を思ってくれてたのか、どういう気持ちで私を見てくれるのか全部見えちゃったっていうか感じたっていうか解ったっていうか……」
『オーケーストップマジすんませんでした』
すっかり素の口調に戻ってもじもじと話す姿は可愛いとしか言い様が無い。しかしてオレ自身の気持ちを見られてそれを語られるというのは気恥ずかしいというより普通に恥ずかしい。一種の拷問と言っても過言ではない。
今後も化け物どもと一戦やらかすような事があるとしたら、その時こそはこんな事が無いようにと心に誓った。それがオレの為でもあり、彼女の為でもある。
『い……今、変身解いたら拙いか？』
「……！　い、い、いま崇の顔を見たら私が恥ずかしくて死んじゃう！」
和は何故かちょっと涙目だった。あと不死身なんだから死なないだろという突っ込みはこの際飲み込んだ。正直言えばオレも恥ずかしさで涙目気分なのかもしれないが、表情に乏しい化け物状態なので顔には出ないようで。
いや……まあどっちみち手足の再生が終わるまでは変身は解けないし、部屋に戻るにしたってこのままの方が手っ取り早く帰れるから良いんだが。
仕方が無いのでオレは和から顔を逸らして体の再生に集中する事にした。

ボスキャラを倒したご褒美的なものがあっても良いんじゃなかろうかとか。
こいつに関しては訂正しておこう。最後の最後でとんでもないご褒美を頂いてしまった。頬を赤らめたまま俯く和を見て、オレはそう思ったのだった。

最終章【終幕　未来への足跡】

最終章　【終幕　未来への足跡】

《先日未明、警察署内に踏み込んできた「メギド」に連れられていた男性は連続幼女誘拐の犯人であり、現在意識不明の重体で……》

周波数変更。

《……の、男性は以前から強盗殺人で手配されており、付近の住民が通報した際には血塗れで路面に放置されていたとの事です。発見時には「メギド」と思われる人物が確認されており……》

周波数変更。

《この「メギド」を名乗る存在は犯罪者に対して個人的な制裁行為を行なっているようであり……》

《この日本でそんな行為が許されるはずが……》

《インターネット上ではこの「メギド」を英雄視する声も上がっており……》

《ネットでは無責任に「メギド」をはやし立てる声もありますが、これは……》

回線遮断。

やれやれ、相変わらず頭でっかちな自称知識人やらコメンテーターは囀る事に余念が無い。そうやって偉そうぶって、何が変えられるって言うんだろう。ビルの上を吹き抜ける髪が、僕の髪を揺らす。見上げればそこには漆黒の空と、輝く月だけが見えた。

「崇」

「……やあ、和」

耳を切る風の音にもよく透る声がする。振り向くと、そこには穏やかに微笑む和がいた。石畳を蹴る硬い音を響かせて歩く彼女は、その途中で僕にホットの缶コーヒーを投げて寄越した。

「サンキュ」
「世間様の評価はどうかな？」
「予想通りだね。人殺しを擁護する博愛精神には頭が下がる。殺さずに司法に任せてるだけでも良心的な処置だと思うんだけどね」
「残念だが、彼らは骨の髄まで平和ボケだよ。加害者相手でも良識人ぶる……自分の身内が殺されても同じ事を言えるなら大したものだがね」
まったくだね、と僕は肩を竦める。どれほど陰惨な事件が起きても、テレビや新聞でニュースを知る側の人間はそんなものだ。身内を殺された家族からすれば、その程度の良識なぞ怒りに火をつける燃料にしかならないだろうに。
僕としては、殺人犯がその罪を贖うなら等しく命を奪う事で釣り合いの取れるものだと思っていたけれど、和は僕がそれをする事を許さなかった。そこに踏み込んだら君は本当に化け物と呼ばれる者になる……彼女が真剣な顔でそう言ったので、僕はそれに従った。
「和、そっちの首尾は？」
「……私がしくじると思うか？」
「まさか」
ふふんと笑う和に、僕はおおげさに首を振って笑う。あの日の戦い。九尾の狐との決着を見たあの時から……もう一ヶ月以上の時間が経っている。僕たちは、二人で歩んでいく未来を語り、そして決断した。

◆◆◆

九尾の狐を倒したその晩。僕は自分の部屋で和と向かい合っていた。僕と和はこれから一蓮托生の間柄である。しかしその力の使い道を、求める終着は違っていた。
僕は、裁かれぬ悪を裁くために。そして、和を守るために。
和は、未来へと向かって次元兵器を求めるために。そして……死

ぬために。
　互いが認識しているそれぞれの目標。しかし、それが我侭だと解っていても僕には和の選ぶ未来を変えて欲しかった。
「和。死にたいっていう願いを諦めてほしい」
「……」
　僕は考えていた事を、自身の気持ちを直球で伝えた。もっと色々考えて、和を上手く説得できる言葉を考えたかったけれど、僕がそんなに器用じゃない事は僕自身が良く理解している。
　和も僕がそういう事を言うであろう事は予測していたのだろう、さして驚いた風も無く僕の言葉を聞いていた。
「崇……では私は何の為に生きればいい？」
　そして、僕がそういう事を言うであろうと解っていたが故に、彼女は逆に僕に問いかけた。これは、試されてるのだろうか。納得の行く答えでなければ僕の要望を跳ね除けると。
違う、彼女は求めているのだ。
勝手な考えかもしれないが、以前ほど彼女に死にたいという意思は無い。
自惚れかもしれないが、僕を得た事で彼女は生き続ける事も選択肢に入れたはずだ。
ならば、彼女はこの生に如何に意味を持たせるべきかと考えている。無限の命を持ったまま、僕と言う絶大な暴威を持ったまま、ただ漫然と生きるのか。次元断層目当てに寄ってくる異世界人を、ただ追い払って生きるのか。応えは、否だ。
「一緒に生きて、未来へ行こう。和が目指した未来へ。だけど……それは死ぬためじゃなくて、救うために」
「救うため……？」
「うん。次元兵器が出来る未来へ行ってさ、僕達で手に入れよう。それでさ、兵器としてじゃない……自由に次元と時間を渡る道具にするんだ。それで……土蜘蛛や他の異世界人を助けてやろう」
　僕の言葉に、和は目を丸くしている。彼女の事だから、僕が一緒

に生きられるから二人で出来る事を探していこう……くらいは予想していたかもしれないが、どうやら予想以上だったらしい。
「未来に向かって生きて、生きて、生きまくって。異世界人を助けまくって……精一杯生き抜いて、やる事をやり尽くしたら……その時は、二人で笑って死ねばいいさ」
ぽかんと呆けた和の顔。やがてその目尻にうっすらと涙が浮き、まるで泣き笑いの顔になる。
「……気の遠くなる旅だぞ？」
「そうだね」
「成功する保証は無いんだぞ？」
「成功するまでチャレンジするさ」
「後悔……するぞ？」
「じゃあ、和が支えてくれ」
そこまで言い切った時、和の目から涙が零れた。泣き叫びはしないものの、押し殺した嗚咽は長い時間続く。
「本当に、君には……泣かされっぱなし、だな」
「人聞きの悪い事を言わないでくれ」
嗚咽混じりに微笑む和を、僕は抱きしめる。震える背を、まるで赤子をあやすようにポンポンと軽く叩いてやった。「子供扱いするな」と耳元で彼女がむくれる声がしたけれど、僕に体を預けたままだから特に怒ってるってわけでもないんだろう。
確かに……僕の考えは甘いのかもしれない。化け物になった事実を受け入れても。この先も化け物と戦っていく事を覚悟したとしても。これから待ち受ける膨大な時間は、海が岩礁を削るような緩やかさで僕の覚悟を蝕んでいくのかもしれない。
だけど、程度の差はあれ未来を恐れ過ぎるのも馬鹿だ。何が起きるか解らない未来を、自分の想像で不安一色に塗り潰すなんて愚かな真似はしたくない。
「きっと、大丈夫。和がいてくれるなら、いつだって希望を見つけ出せる」

「……そうか。なら私も君といる限りは希望を失うまい」
僕を……僕たちを、楽観的だと笑う人がいるなら笑ってくれて構わない。僕たちの選択は愚かではない。人は、無限の命だろうが有限の命だろうがそうやって生きていく。日々から、友から、愛から希望を拾い上げて。
僕を……僕たちを、異常だと罵るならば好きにしてくれて構わない。日常から異常に叩き込まれて、これほど前を向けるものかと。だけど、僕たちは僕たちだ。誰が信じずとも、信じあえる僕らは前を向いたのだから。
和を抱きしめたまま、僕は一緒に立ち上がる。彼女の頬に軽く口付けすると、その手を引いて玄関へと歩き出した。別に、今から旅に出ようって訳じゃない。出掛けなくちゃ行けない事も無い。ただ「ドアを開けて外に出る」それが旅立ちの為の儀式のようで。
「じゃあ、僕たちを始めよう」
「……うん」
開け放ったドアの先から、眩い光が降り注ぐ。それが、僕たちの新しい始まり。約束を交わした僕らの、最初の一歩だった。

◆◆◆

「さて、こちらの首尾だが……」
和が僕の隣に立って手を繋ぐ。あの日から一ヶ月、予想していた通りに次元断層狙いの異世界人と幾度も交戦があった。
勿論、土蜘蛛のように救えない者もおり、解り合えぬままに命を奪った者もある。だが、救えないまでも解り合える者もまた多く存在していた。
「猫又が我々に力を貸してくれるそうだ。人への擬態能力を持つ点も心強い、早速情報収集に入ってもらっている」
「一つ目小僧からは？」
「次元断層絡みと思しき情報が一点。あとは君の標的が四件だ」

いきなり喧嘩を売ってくる輩もいれば、お願いしますと頼みに来る者も多くいた。残念ながら土蜘蛛の時と同様に、彼らを望む場所に帰してやる事は今の僕らには出来ない事だ。

ところが、僕らの目指す未来を知る事で協力を申し出る者がいた。彼らの多くは僕らのように長い生を生きる事が出来ない。協力してくれても、君たちを直ぐに救う事は出来ないのだと説明しても、彼らは一様に口を揃えて言うのだ。

【ならば君たちが時を行き来する術を手に入れたなら、この世界に……この時代に帰ってきて私たちを救っておくれ】

……と。元より、次元兵器でここに流された異世界人を救う事は目的に含まれているのだ。助けるべき彼らを迎えに行くのだという思いは、きっと僕らを後押しする力になる……そう考えた僕らは、力を貸してくれるという異世界人の力を借りる事にした。

「事実、彼らが持つネットワークは広大だ。私もまだまだ世界を知らなかったと見える」

肩を竦める和に、僕は苦笑する。何せ「妖怪」と呼ばれる彼らは人間には及びもつかない力を持っている事が多い。こと情報収集に関しては、下手に僕らが歩き回るよりも遥かに正確で膨大な情報が手に入る。

今や僕らの協力者はゆうに二桁に上る。これから歩む未来を考えればまだ増える可能性はあるし、とんだ百鬼夜行が生まれたものだ。

「さて……じゃあ僕もそろそろ仕事に入らないとね」

顔の皮膚が、パキパキと硬化し始める。

「ああ、次元断層絡みは我々の仕事だ。標的は通称《飛頭蛮》。調査によると次元断層での回帰願望は無し、狐と同類と言えば解るか？」

「……理解したよ。被害者は？」

「残念ながら……既に三人は喰われている」

振り向かずに問うた僕の背から、怒りを含んだ和の声がする。服の下で、メキメキと体が膨張し始めていた。

「躯体変換（リアクト）」
服が一気に弾け飛び、限界まで膨れ上がった体が一気に鋼の硬度に達する。街の灯を照り変えず黒銀の装甲に炎の鬣が噴き上がる。
『オーケイ、交渉の余地無し。キチっとブチ殺してやるさ』
それが人間であるならば、てめェの罪を思い知らせるためにも半殺しくらいにゃさせてもらうが最終的な判断は人間の司法機関に任せる。
しかし妖怪とオレたちが呼ぶ異世界人の大半はこの世界に住む人間を超えた能力を持ち、人には捉えられず、裁かれる事は無い。勿論、オレたちに敵対的な異世界人全てを殺すような横暴な真似はしていないが、それでも狐のようなどうしようもない輩が多数存在するのも事実だ。
化け物同士を縛る法が無いなら、あとは単純な解決方法。それこそ罪には同等の罰を与えるくらいしか無い。勝手な話しだが、異世界人の犯罪者を手元に置いて更正させてやるなんて余裕はオレたちには無いのだ。
「……回線接続（コネクト）は移動中に行う、いいな」
『オーライ、マスター』
応えてオレは地面に肩膝を付く。このやりとりも慣れたモンで、姿勢を低くした俺の元に歩いてきた和は小さく跳んでオレの膝に座った。彼女の背と膝の下に腕を差し入れて持ち上げる。いわゆる「お姫様抱っこ」ってヤツだ。
『んじゃあ飛ぶぜ。いつもどおり、しっかり掴まっててくれ』
スラスターを展開し、膝を屈める。後は此処から大ジャンプを決めて飛行に入る……その時、腕の中にいる和がオレに問いかけた。
「崇、君は後悔するか？　自身が選んだ道を」
君が選んだ道は、認められる事の道だ。
君が行っているのは、悪を討つ行為でありつつも世界は正義と認めない。
君と私だけの孤独な道のりで、誰も深く関われず、誰にも深く関

われない。
その問いは、和から問われているようでもあるが、自身が内面から何度も問うて来る言葉だろう。
『クックック……なぁ和、何度も言わせんなよ？』
解っているのさ。俺がやってることが如何に幼稚な事か。暴力で解決する正義なんてありゃあしねェと、誰より俺たちが解っている。
だが、頭でっかちな奴等はヒーローが正義の味方であると勘違いしてやがる。善という存在が正義を翳し、悪を滅ぼす。それがヒーローだと。そうして人々に安息と与えるのも、確かにヒーローを言えるだろう。
「ふふ……それは済まないな。私はどうにも君のアレがお気に入りでね」
だが、正義と道理で裁けない悪は必ず存在し、正義の味方がその在り方を貫くならば救えぬ誰かは必ず存在する。悪を駆逐するのは正義では無い、罪に理を持ち込まず裁く単純な力だ。

ああ、必要ならオレは世界の敵になっても構わない。かつて《支配者》と呼ばれる存在に世界が団結したように、オレを唯一の敵として世界が手を取り合うというならば……ほら、それだって世界の架け橋になったヒーローだろう？
だから、オレに後悔なんて無い。そして傍らにいる君が望んでくれるなら、オレは何度でもこう言おう。スラスターを全開にして夜空に飛翔する。
『この世界には、ヒーローが必要なのさ』

A
C
K

完

F
L
A
S
H

B

最終章【終幕　未来への足跡】（後書き）

どうも、犬助です。

最後まで目を通して頂いた方、本当にありがとうございます。感想云々では無く、少なくとも最後まで目を通して頂けただけでも大変ありがたい思いです。

プロローグ前書きでも申し上げました通り、本作は某社の新人賞で落選した作品です。編集さんには中々手厳しい指摘を多々受けており、心折れそうだったのも今は良い思い出ですね。（特に「キャラクターがストーリーに進まされている感がある」という指摘は思わず肩を落として凹んだほどです）

しかしながら、良い結果を伴わなかったと言えど苦心して書いた作品は愛しいものです。そしてこの作品が「楽しい」「面白い」と思って頂ければ……それだけでもこの作品を書き上げた意義があったかと思います。

周りの友人は二次創作がメインですので、オリジナル作品を公開出来る場な大変ありがたいものです。

私も皆様の作品を楽しんで読んで行きたいと思います。投稿もまだ頑張りますよ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3976l/

FLASH BACK

2010年10月8日15時03分発行